

我が国古代稲作の系統*

国 分 直 一

Tracing the Descent of Rice Cultivation in Ancient Japan.

By

Naoichi KOKUBU

A careful study of the marks of rice left on the earthen vessels unearthed at various places has led to the consensus of expert opinion that the rice in ancient Japan can be classified under the A type or so called Japanese type.

As to the route of its introduction into Japan, there are variety of opinions on the basis of language, dissemination of rice cultivation, or introduction of culture.

Some are of opinion that it came from the south, while some others maintain that it was introduced from the north. There is also an opinion that traces the said type of rice back to both the north and south.

The home land of "Japanese rice" is, according to Dr. H. Ando, traceable to Chian-nan. Dr. K. Matsuo supports Ando's theory on the ground that it bears a close resemblance, in its shape, size and qualities, to the A type currently raised in Huacheng.

Dr. H. Oka claimed, basing his inference on his own observation, that the rice plants were to be classified into two major varieties; leaving some dubious kinds unassorted with either group.

He further concludes as follows.

(1) These two major varieties or groups are to be named, according to the divergence of their geographical distribution, "Continental" and "Insular" groups.

(2) The insular group is to be named further classified in the "Tropical" and "Temperate" Insulars according as the difference of ranges of their geographical distribution.

Concerning geographical distribution of rice, Dr. S. Morinaga says that the B type or the Tropical Insular predominates in North China while the A type or the Temperate Insular is commonly found in Chian-nan district.

We, however, must pay good attention to the fact that both the "Continental" and "Insular" groups are found in the Ryukyu (Loochoo) Islands and South Kyushu.

The prehistoric stone knife of the Yayoi period has been the conclusive evidence on which is based the theory of Japanese archaeologists that the rice in ancient Japan came from North China.

In spite of their assertion, stone knives unearthed in South China and Malay

* 水産講習所研究業績 第167号

bear similarity to those which are believed to belong to the earliest stage of the Yayoi period in North Kyushu.

So this new corroborant, I believe, will be conducive to our agriculturalists' view that Chian-nan may be the homeland of the A type rice. The present writer, however, do not choose to view the passage to Japan of the rice in the same light as Dr. Ando.

A lot of human bones in the old tombs belonging to the early phase of Yayoi culture were excavated by Dr. T. Kanaseki's comparative study on the bones revealed a close affinity between the prehistoric people of Doiga-hama and that of South Korea.

On account of this finding, I think that the rice in ancient North Kyushu was probably brought by the people from South Korea.

In Indonesia where agriculture is still in primitive stage, they generally prepare, without ploughs, the rice bed by making horses or cattle tread upon the paddy field.

It is very interesting to know that such a primitive way of rice cultivation is found still availed in Ryukyu, Oshima, To-kara Islands and the Osumi Peninsular in Kagoshima Prefecture.

As a result of my ethnological study on the Aka-gome or rouged rice as well as my archaeological research on the remains unearthed, there will be no mistake in saying that there were more than one types of rice in ancient Japan.

Judging from the marks of grains left on some ancient earthen vessels found in South Japan, both Insular and presumably Indian types are to be found there, though the difference of the one from the other is not so evident.

After Investigation of prehistoric sites of rice cultivation in South Japan, I have come to the opinion that both paddy field and upland rices must have anciently been cultivated in this country.

A Yayoi type earthen vessel discovered by Mr. H. Morizono at the prehistoric site upland in Tanega-shima had marks of long type grain indicative of no traces of paddy field cultivation.

It is a well-known fact that the rouged rice is the most commonly raised one in Southeast Asia. And this kind of rice dialectically known in South Japan as "Tohboshi" or "Toboshi" ranges in its distribution over a chain of islands between the east coast of Formosa and South Kyushu.

The Chinese, "Tau" or "Tao" which means rice, is said to be affiliated with the Anamese "Gao" and "Ko" in Mon language.

The Japanese word for rice has no connection whatsoever with the Chinese Tau or Tao, but our language has many words affiliated somehow with the words for rice of the South Sea Islanders.

The word "Toboshi" constitutes one of the factors which help confirm the

southern origin of the rice backed up by its current range of distribution and the said evidences afforded by our recent archaeological researches.

The present writer is much interested in the distribution of the similar mortar, pestle, and high-floored granary among Ryukyans and other southern Pacific Islanders. Viewed from this angle, these technical features of agriculture are to be considered to have something in common with the farming culture of southern peoples.

I am of opinion that the old customs such as tattooing and extraction of teeth are also important factors in ascertaining the southern origin of culture. The agricultural festivals in Japan will be another important subject of study, if they prove to have any affiliation with those in South Sea islands.

For further detail of the Insular type rice we have yet a long time to wait till after an extensive study on the agriculture in southern islands is over.

(一)

日本古代の伝来稲は日本型水稻であるとする事、又その稲作の故郷は華北であるとする事、その伝来経路は華北—朝鮮—北九州のコースをとつたであろうとする事は考古学者側に於ける有力な説になつてゐる様に思われる。

然し私は若干の疑問をもつてゐる。先づ品種については日本型以外に異種異型がなかつたかどうかを検討する必要があると思ふ。又水稻以外に陸稲作が問題になると思ふ。稲作の技術についても従来考えられたことのない南方島嶼型の技術について考えてみる必要があるのではないかと思ふ。

稲作については特に農学者の側から屢々優れた研究が出されているが、筆者は民族学的立場から我が国古代の稲、特にその系統について追究してみたい。そしてその結果が農学者側の研究といかに相関するものをもつかを明かにしてみたい。

はじめに赤米を手がかりとして考察を行つてみたい。赤米が東南亜細亜に顕著な米であることから注目したものである。

考古学的には古代粳、土器に遺る粳痕の考察はもとよりのこと、遺跡の地理的状況についての検討も必要であると思ふ。

又伝説のきめ手に屢々用いられる伴存文化との関連にも注目すべきであると思ふ。その他稲作技術を東南亜細亜に遺る原始的な技術との比較に於いて考える必要もあるかと思ふ。稲作を、従来とかく関心の外におき勝にしてきた南方との關係に於いても考えて見ようとするなら、南方系農耕技術についても注目する必要があるが出てくると思ふ。

古代稲の問題、特にその系統を考えることになる時、きめ手が十分でないために、どうしても文化人類学的な括りにまで考察の視野を拡げて考えて見る必要があるように思われるのである。本稿は以上のような考え方の上に考察を進めるものであるが、資料が不十分なために、問題を提示するに過ぎないという場合があるかと思ふ。

(二)

米には様々の色があり、又香をもつものもあつたようである。明の李時珍の本草綱目には粳

の種類百余、その米は「赤白紫黒、堅鬆有香無香」と種々あることが記載されている。

私がおの中赤米に関心をもつのはそれが東亜アジアに顕著な米であるに関らず日本にも見られることから、日本に於ける稲米の系統を考える上に何んらかの手がかりが得られるのではないかと恐うからである。初めに日本の赤米を問題にしてみたい。

鹿児島県史には普通の米即ち真米に対して赤米のあることが記載されている。「米には真、赤の区別があるが、真米とは普通の米で、赤米は野米、野良米、とぼし米とも称する粗米で蕪田棚田の下々田等に作られる。赤米は早熟であるが収穫少く製米にも特別の手段を要し、当時下層の食用に供されたのである」と見えている。以上の記載は上田強氏の日向経済史雑考によつてゐる。全県史によると近世初頭には真米地、赤米地の区別が立てられていたことが記載されている。「慶長、寛永等の内検に於いても、真米地赤米地の区別を立て、居り、納租に当つては赤米地より赤米を以て納めるを認められた様であるが、真米作付可能の場所では必ず真米を作らせ真米地を故なく赤米地とするを許さなかつた」と見えている。薩隅日田賦雑徴写によつたものである。

赤米は最近迄作られていたし、尙現に作つてゐるものもある。鹿児島県伊作久町田尻の戸越佐太郎氏は絶やさないので赤米と匂稲（カバシコ）といわれる米を作つてゐると鹿児島民俗学会の築地健吉氏が御教示下さつたが、築地氏がわざわざとりよせて見せて下さつた戸越氏作の赤米を見ると細長小粒にして、日本型米に比すると明らかに異型を示していた。

指宿市の高等学校勤務の西苗喜作氏は勤務のかたわら稲作をしておられるが、三十数年前迄はトボシ即ち赤米を作つていたと語られた。然し当時は日常は稗、粟、甘藷が主食で特別の祭日に赤米を炊いたという。それは美しい赤飯であつたが、赤米を作らなくなつてからは小豆を入れているという。小豆を入れた赤飯がいつかにはじまつたかは興味ある問題であるが、少くとも西苗氏の場合には小豆を入れた赤飯に先行するものとして、赤米を炊いた赤飯で祭や行事の目を祝つていたことを興味深く思うものである。西苗氏は今は真米を作つておられるが、それでも一段歩に1斗8升の赤米が1951年の収穫の際に混在していたという。尙興味深いことは西苗氏によるとトボシは顕著な上拵がりにのび拵がる草型を示し極型は細長いので容易に判別除去出来る。それで農家では播種の際には真米の種子をえらんで播種するが、毎季節トボシが出現するという。前川文夫氏が同様の事実に注目されて「なお時には古い型が潜在して現われるのであろう」と述べている¹⁾ ことを想起させるのである。

赤米は真米に比して栽培に手数がかゝらないようである。稲は元來熱帯性作物であるから高温地帯に於いては野放しで出来たのである。然し低温地帯に於いては自然に低湿地に適應する品種が限定されたものであろう。

鹿児島県史にあげられた真米即ち現在一般に日本に於いて行われている米は低温地適性の米であり、特に入念な手数を必要とする米であるが、赤米は粗末な蕪田棚田等々の下々田で作られるというのであるから、高温地帯の野放し稲の特性を示している。野米、野良米と称する所以である。

台湾に於ける肥料試験に於いて在来種は肥料に対して鈍感であるが、蓬萊種（内地種）は敏感であるとする磯博士の研究は興味深い。即ち在来種は無肥でも相当量の収量があり、多肥でも多収にならぬという特性を示しているのである。

南九州に於いて赤米が根強く比較的近年迄作られてきたのも、南九州が温暖にして、あまり手を入れないでも多収されたからであらう。農林省山川試験場々長秦信親技官は薩南山川地方

の赤米と日本型稲との交配を試みた所、親和性を見出されなかつたことを教示された。秦氏による薩南山川地方の赤米には早熟と晩熟とがあるとのことであつた。氏の御案内によつて山川地方で見た水稻は晩熟の赤米で稲実には明瞭な長型を示し、草型は顕著な松尾孝嶺博士の所謂C型を示して真米の草よりも約30cmほどぬき出して、上拵がりに旺盛たる成育を示していたが、その稲実には真米が黄熟しているのに未だ半熟の状態を示していた。

薩南諸島では種子島の南端葦永部落の宝満神社（1534年設立）でも赤米を作り例祭日にそれで酒を作り、祭典に供しているが、この赤米は粒型はやゝ細長いが幼苗時の形態は日本型に属するとされる。然し同島には南方系に属する陸稲赤米が知られている。分蘖多く、葉片狭小、葉色淡色を示すもので、籾は無芒、玄米は細長く、粒色は赤色を呈し、不稔歩合高く、30%～40%に及ぶとされる。粒型並に幼苗時の形態は明らかに外国稲に属すると云う。²⁾

筆者は1954年3月大島の名瀬博物館によつた時、大島にも粒型細長の赤米があり、トボシとよばれていることを聞いた。又同年8月、徳之島面縄で聞いた所によると、全島東天城では今尚細長小粒の赤米を作つていて、トブシとよんでいるということであつた。草型は高く延び、上拵がりに拵がるというので、C型である。又同年4月沖繩本島国頭の奥部落ではイッターメーとよばれる長型の赤米が古く存在したことを同地の古老から聞くことが出来た。又、トウバーサとよばれる赤米のあつたことについて国頭羽地の郷土史家宮城真治氏より教示を受けた。沖繩本島南部に於いて芭蕉の花の赤いつぼみをトンバーサとよんでいたということを知り、植物学者多和田真淳氏が語られたが、これは赤米からの類推によつて生れたよび方であろうと思ふ。

民俗学研究所の酒井卯作氏は久米島の採集をされて「この島の老人が昔八重山にトウボシがあつたといつていた。この久米島にも、ングミ (n'gumi) と称する赤米とアカモチと称する葬式用の赤米があつたといつていた。アカモチは中は白色で内地米と相違ないが、何故に葬式に用いるか不明だつた」と御教示下さつた。尚八重山群島石垣島にトウボシという米があつたということは、古老から採集したといつて、喜舎場永珣翁³⁾が御教示下さつた。

石垣島では野を焼き、広く浅耕して古来粟と陸稲とを作つていたとされる。この島で陸稲作が早くから行われたことを実証する資料がある。1954年4月石垣島登野城山原の貝塚で多和田真淳氏と採集中、八重山系先史土器の裏に長型籾痕の圧痕を留めるものが得られた。これはその粒型からいゝ印度型といつてよいと思われる。この遺跡は先史系土器とゞもに明代青磁の共存が見られるので、その年代は遠く溯ることは出来ないと思われるが、トボシ系稲が早く作られていたことを傍証するものとして有難い発見であつた。

松尾孝嶺博士によると対馬でも印度型赤米が神社のお供用として作られているという。⁴⁾炊くと小豆のように赤色になるとのことである。又古島敏雄助教授によると朝鮮にも印度型米があると云う。氏はそのことから「朝鮮も簡単に北支と日本との橋とはならない」ともいわれている。⁵⁾

赤米には日本型のあることは前記宝満神社の赤米によつてもわかることであるが、日本型赤米は相当北方の寒冷地でも作られていたようである。然しながら黒潮水域は暖地であるので、以上に述べたように南方種と考えられる長型赤米が相当広く、今尚分布しているのである。然して問題はこれら黒潮水域の長型米の栽培上限はどこまで溯れるものか、その伝来経路は如何に考えられるものであろうかという点にしばられてくる。

前川文夫氏は古代日本の稲について、玄米の色は恐らく赤褐色かそれに近い色であつたらう

とされる。そして「今栽培しているものの中にも時に九州あたりで赤米いわゆるトウボシが出現することがあるというから、これも好んで赤い米を作つたのではなく、色のうすいものうすいものと選んで来た結果が今日の玄米であつてなお時には古い型が潜在していて現われるのであろう」「山野によくある雑木の一つに秋に可愛い、紫色の円い実をつけるムラサキシキブという木があるがこれを所によつてはコメゴメとかコメツキとかいう。紫色の小円実に米の聯想は今みると不思議だが古い米が赤米であつたとすると何かうなづけるように思う」等と述べられている。又「今の稲でも花粉がめしべについて受精が終つてから勢よく子房即ち若い実が発育して時にはたて計り長くて幅の広くない、いわば印度型的な形をはじめはとつては面白い事実であつて、途中から幅の生長が盛んになつて日本型になつて来るのであるからずつと前は多分細長いものでなかつたかという可能性も考えられる」と。然しながら出土米及び籾の圧痕からみて、縦と横の比は1.8内外におちつくから現在の品種の根底は少くとも彌生式文化の時代の稲にあつたということになるともいわれている。尙古代の稲が今の稲と違つていたと思われる重大な点として籾が熟すると脱落し易かつた、いわばその類が原型に近かつたと思われる事であることを注意されている。⁶⁾ 従つて以上をまとめていうと古代の稲は本来的には長型であるが彌生式時代には現代の品種の根底をなすものとなつてゐる。然し色は赤米で印度型の秬米のごとく脱落しやすいものであつたらうということになるのである。

柴田実教授が「フツヒメの信仰」に於いて大和丹生都比売神社のニホはニホで古く新嘗のニホに祀られる米もまた赤色をしていたのでなかつたかと興味深い見解を述べておられる。^{*7} 宮中の神式に赤米を用いたとすると、これが日本の古い米を代表することになるといえよう。

尙粒型からいうと必ずしも縦と横の比1.8前後の日本型のみではなく、所謂原型に近い型を示すものも混在していたように思われるのである。

日本古代に於ける長型の赤米についての最も古い实例としては次の例がある。

滋賀県甲賀郡岩根村善水寺（和銅年間開基）の仏体中、国宝に指定された本尊薬師如来はじめ12体（1200年以前の作といわれる）の修理をした時、薬師如来5体の胎中から麻様の袋に入れた籾が発見された。その時、稲実に於ける日本型と印度型との両型のあることを最初にとり上げた学者として著名な加藤茂苞博士は「この籾を観ると印度の野生稲に似て居る所がある。やはり赤米である」といわれたという。盛永俊太郎博士は以上の例をあげた上で「その頃に多少でも秬型の稲が作られた一つの証拠となるのではあますまいか」といわれている⁸⁾

最近農林省稲作史研究会で出した「出土古代米」によると彌生式期から歴史時代にかけて全国的に出土米の写真相がかけられ、粒型について簡単な記載がなされている。全写真集の資料によると彌生式期以来粒型は必ずしも均整でなく大小形状の異なるものが見出される。即ち、短型、やや長型、長型等と変異が見出される。その中ではつきり長型と記載されているものは長野県宗賀村平出の31号住居址出土例（土師期）、栃木県唐沢城址出土例（平安朝）がある。執筆者の一人佐藤敏也氏にそれら長型の品種についておたづねした所「平出出土例は不明、唐沢城址のものは南方種と思う」と御返事をいただいた。粒色については不明であるが平安朝期の唐沢城址から南方種が出土していることは前述の奈良朝の仏体中より印度型赤米があらわれたことと相まつて興味深い資料といえよう。但しこれらが輸入米であるか国内で生産されたものであるかは不明である。筆者は我が古代に南方種か或いは南方種に近いものがありえたと思えるものであるがそのことには後で詳しくふれたい。

中世末近世初頭には「大唐」即ち「ダイトウ」というよび方が登場するが、これは明らかに

輸入米に起源を發するよび方かと思われる。

新撰犬筑波に「大唐をこがしてや飲ぬらん」とあることよりすると「ダイトウ」というよび方が大永、天文の眞には行われていたと思われる。これについて松屋筆記には大唐を「今の唐もろこし也」という説をかゝげている。然しながら他の多くの慣用例から考えると「大唐」は赤米であつたらうと思ふものである。

慶長八年の長崎学林版の日葡辞典 (Vocablario da Lingoa Japan: 1603, Nangaski.) には「ダイトウゴメ 赤米」と見えている。

寛永十五年刊の松江重頼の毛吹草の諸国名物鑑によると「肥前白大米 日向赤大米 大隅薩摩二ヶ国=作之 土佐大米餅白米ナリ 豊前芳米」とあり、「白大米」にはシロダイトウ「赤大米」にはアカダイトウ「芳米」にはカバシコと仮名がふつてある。徳川初期九州に於けるダイトウの分布がある程度わかるのである。又ダイトウに赤白二種あつたこと、粳米と糯米のあつたこともわかるのである。黒川玄逸著の雍州府志 (貞享元年の序あり) 卷六、土産門に「其外皮帯赤色 比白米則風味為劣 謂大唐米則糲也 中華書大冬米」とある。大冬米とすることの典故は不明であるが、日本でダイトウといわれたのは中国渡来米であることからきた名称であることは疑いえないことであると思ふ。

寺島良安の和漢三才図会 (正徳二年の序あり) に「案籼本此天竺之種 而宋時種于中華而伝於本朝 故呼大唐米 今亦西国多種之 能繁而早熟 凡粳米亦有赤白二種 特此米赤者多白者少 故通称暹暹 日向之産烏赤色良 薩摩之産鮮赤色次之 凡赤米能舂去糠乃白色帯微紅文 為飯能傍殖不粘 温時有香氣甚佳 冷則風味疎而食之易飢 以為賤民食 又有秈糯 謂之大唐糯 而有赤白二種共稍粘」とある。以上の記載はよく秈米の特色を説いている。

以上によつても伝来の秈をダイトウとよんだことは顯著なことであるが、土民は「たうほし」とよんだという記載が貝原益軒の続筑前風土記 (宝永六年) に見えている。

「籼大唐米と云ふ。土民はたうほしと云ふ。近世異国より渡る。米の色赤く粒小さくして諸稻に異なり味啖といへ共性よし。占城米陸田に種ふ。粒大なり」とある。原文では占城米に「のいね」と仮名がふつてある。以上によると益軒は籼と占城米とを別にしているが、占城米には「のいね」と仮名がふつてあるからには籼系の野稻をさすものであろう。籼は占城米の占から転じて用いられた文字ではなからうか。然して益軒記載の占城米 (のいね) は「粒大なり」とあるから籼系のものにも細長小粒型とよもに長型大粒型とあつたものであろう。

百姓袋によると「唐土の米は日本の米より性悪しとみゆ、されど五畿内又ハ九州肥後米の如く成るもの所によりて有りといへり。今適唐船より糧米に持来るは皆福州広東の米にて皆野稻たうほしなり。東京、交趾、東埔塞、占城、台湾、暹羅、咬啣吧等の米皆たうほしなり。これらの国々いづれも野稻などを蒔きちらしおきても暹国は一年に二度あるひは五度づつも田作るゆえ人間の食事には余りて米多きゆえ一升五六銭、百斤にて二三匁より高きことなし」とある。中国に日本米と同様の米のあることを伝えていることは興味深いが華南及び東京、交趾その他南方地域の米が「たうほし」であるといつてゐることは更に興味深い。所で「たうほし」というよび方であるが、それは一般庶民殊に西国の土民の間に行われたもののように思われる。そしてそのよび方は現在でも南九州から南島にかけて存在するが、文献の上でそれがどの位溯り得るやは不明である。古今著聞集卷十八に俊頼朝臣が「たなかみ」という所で、かけつみたる稻をなにという稻か」と問うと「法師子の稻なり」といつたという記載がある。然しこれは「たうほし」とは関係をもつものではなからうと思ふ。

中世末以来中国華南伝来稻が一般には「ダイトウ」又は「大唐米」とよばれていながら土人の間では「たうほし」とよばれたというのは西国辺境の地方には一般的に秬型に近い赤米が作られていて「たうほし」と普通によびならされていたので、それと酷似した華南伝来稻に接した時にもそれを土民たちは「たうほし」とよんだものではなからうかというのが私の推定である。そして南九州から南島にかけてのトボシ又はトブシ系の言葉は古い言葉の残存するものとして考えられないものであろうか。

南方熊楠翁は犬筑波の句から「大唐米乃ちトボシの事なるべし、唐より渡り乾飯にして其をこがしにせし故唐ぼしひと云しならむ」と郷土研究一卷に書かれたことがある。それについて柳田国男先生は「稲を乾飯と云うのが家猪(ぶた)をハムと呼ぶと同様不自然」であると批評されたということを翁自身、続南方随筆の中に書いておられる。全随筆の中では翁はしきりに「タウボシは唐乾飯也」という説を強化されようと努力されているが、その不自然さは救いようもないようである。

しかしここにこの言葉の系統を考える上に光を導くことができるのは、このよび方が沖縄諸島をもつて南限とせず更に南下して台湾東海岸アミ族の間にあるということである。「アミス族の南勢蕃に稲をテボシとある。又アミス族の一二方言に甘蔗をトブス又はトボスと云う」として、それが西南日本に於けるトボシに関連することに最初に注意されたのは新村出博士である。⁹⁾ 尙、馬淵東一教授はアミ族では稲は *parai* 米は *vurats, varats* であるが陸稲を *tipos* とよぶ例があることを御教示下さつた。

甘蔗をトボス或いはそれに近い音でよぶ例は台湾原住民族の間に広くある。パイワン語では *tsubos*, ブユマ語では *tsubūs*, サアルア語では *tubuse*, ツォウ語では *tēfēsē*, ブスン語では *sibos, tsi'bos*, セデツク語では *sibos*, アタヤル語では *sabilus*, サイシャット語では *ka-tēbos* である。¹⁰⁾

甘蔗をトボス或いはそれに近い音でよぶ例は南方には広くある。以上の中、興味深いことはアミ族に於いては稲と甘蔗をほぼ同様にトボス系の音でよんでいることである。然してこの二種の植物が同様のよび方をされていることには理由がないわけではないように思われるのである。というのは甘蔗の原生種は栽培種に比して矮小にして草型は野稲に近い趣を示している。甘蔗は九州本土では南端地方の指宿でも穂を生じないと聞くが、南方では穂を生じる。台湾では発穂以前に刈取つてしまうので、台湾に居たものの種実を知らないが、同一種属に属すると思われる蘆粟(サトウモロコシ)が暗赤色の実をつけることより見て、同様の実をつけたものではなからうか。秋に可愛い紫色の円い実をもつムラサキシキブとよばれる植物をコメゴメとかコメツキとかよぶことが赤米の連想によるものでないかと前川文夫氏が注目されたことは上述したが、同様の呼称の転移は甘蔗と赤米との間にあつてもありえたのでなからうか。

そのように転化したよび方と共に南方種が南島経由で西南日本の本土にも延びているものと考えられることは出来ないものであろうか。

岡彦一博士は稲品種間の系統発生的分化に関する研究¹¹⁾の結果、印度から支那大陸の南部に分布する大陸型とジャワ、フィリッピンから台湾山間部、日本に分布する島嶼型に分けている。大陸型は加藤博士の印度型であり、島嶼型はその日本型である。岡博士は更に島嶼型を熱帯型と温帯型とに分けている。熱帯島嶼型はジャワの有芒系の *bulu* によつて代表されると考えられている。¹²⁾ 岡博士の稲品種の分類によるなら、我が本土の稲品種は温帯島嶼型に属するわけであるが、言葉の上には *bulu* 系の *ulu* を語根にもつ *ul-shine* の如き言葉がある。

馬淵東一教授が示された *vurats*, *varats* 等もまた *bulu* と関係をもつものである。 *bulu* は更に印度系の言葉に連がりをもつことは明瞭である。そしてこの西から東へ相似の語音をもつ言葉の分布することは単なる偶然の現象と判断するわけにはゆかないと思うものである。

南島についてはいさゝかふれてきたが、こゝに於いて、更に詳考する必要があると思ふ。

盛永俊太郎博士が「古代出土米」に於いて「現在の琉球の在来稲には印度型、日本型の温帯型、熱帯型が混在しているように思われる」と述べておられることから見ても、南島は極めて興味深い型の稲品種を維持してきているといえよう。

南島の稲作についての記載としては1477年閏伊是歴に3名の朝鮮人が漂着した際の見聞をのせたものが最も古い。当時同島では鉄器としては僅かに土をほぐして種子を蒔く程度の小鍬がある程度であつたが、陸耕して粟の種子を下し、水田に稲を作つていたとする見聞記録が李朝実録中の成宗大王実録に載つている。伊波普猷氏はその部分の記載に見られる粟は穀物の総称であろうと推定されている。

南島に於ける農耕には耨器による耨耕以外に家畜に水田を踏ませる特殊な方法のあつたことが上記の朝鮮人漂流者の見聞記載の中に見出される。即ち稲作には陸田作と水田作とあつたと考えられるのである。耨耕が先史時代以来行われていたことは耨器と考えられる石器の出土することからわかるが、興味深いことは石器の遺形を後代の鉄製耨器の上に見出しうることである。

これら南島に於ける農耕技術については今直ちにその詳細な内容に立入る必要がないので、南方系農耕文化の問題をとりあげる際にのこしておきたい。そしてこゝでは再び古文献の上のこされた一つの言葉を問題にする。康熙五十三年辛卯三月二十四日の序のある混効驗集によると「ふすめみおばに 熏美御飯と書 赤飯の事也 かしきいとも云 和詞にはこわめしこわいひとも云 強飯と書」とあり、又「みおばに 美飯の事也 おはこ共云」と見えている。「みおばに」が赤飯であるということは当時小豆を入れて炊いたものを意味していたものかどうかは不明である。小豆を入れる以外では、赤米を炊いても赤飯となる。

齊藤正雄氏はこの「ばに」がインドネシア語の稲にあたるボルネオのダイヤク語の *tani*, スマトラ中部の *banih* と同源であることを指摘されている。¹³⁾

南島にトボシ系の稲の呼称とともにトボシ系の稲の粗度が見出される上に、インドネシア語系の *バニ* があることは興味深いことである。南島が南方系品種の移入経路としての意義をもつていたのでなかろうかとする疑いは愈々濃厚になつてくるといえよう。

本項を書く上に文献について金関丈夫博士から多大の御教示を受けたことを明記したい。

(三)

稲作の系統を考えるためには、尙考古学的に追究してみる必要がある。

稲作について考古学的に考えるためには、農具の上から、或いは稲実、稲実の痕跡を留める土器の発見を通してある程度考えることが出来ると思ふ。

寺師見国氏が大隅半島出土の彌生式石器について採図されたものの中には、所謂有肩石斧、靴型石器の類型が豊富に見出される。有肩石斧標品中には器軸の全長 26.3cm 刃部の最大幅 4.6cm に及ぶもの（打製品、岩川町笠木田圃地出土、スレート使用）や器軸の全長 24.3cm 刃部最大幅 5.8cm（砂岩使用）に及ぶものがあり、明らかに深耕石器と見てよいと思われる。以上の中、後者は出土地の状況不明であるが、前者は田圃中から出土していることから見ても

恐らく水田耕作に関係ある耕具と見てよいであろう。

尙興味深い資料がある。薩摩郡鶴田村柏原小学校所蔵品中には砂岩磨製の犁型石器が見られる。刃部の一部に欠落があるが、偏平長大で隋書流求国伝に記載されている「長尺余潤数寸」なる石器の記事を思い出させる。同様の石器は台湾西海岸の先史時代遺跡に豊富に発見され、台湾に於いては犁耕文化の証跡と考えられているものである。

北園博氏は肝属郡高山町に於いて有肩石斧ととも石庖丁、靱痕を有する彌生式土器を採集されている。採集地は畑地、靱痕は長型である。有肩石斧にはチピカルな、左右相似的な形式を示すものもあるが、大隅、薩摩半島部に於いて普通に見られるものは粗造の有肩形式で刃部はやゝ靴型を示す石器が多い。それらは台地性の陸耕地に於いて見出されるもので、明らかに耨器であると考えられるものである。現在南海諸島の比較的高地では山林を焼き、焼いたあとの灰をかきまぜ、極く浅い耨耕がなされているが、その程度の耨耕なら、上述の薩摩半島部の石器は十分役立つものと思われる。台湾の高砂族は比較的近代迄石器による耨耕を行つてきた。同様の石器は南島の先史時代に一般的に見出される。その遺型は南島の鉄製耨器ピラに見出すことが出来る。ピラ型の石器は鹿児島県半島部の一部縄紋後期遺跡からも見出されるが、同様のものは西部九州を更に北方に及んで縄紋後晩期遺跡出土品中にも見出される。

以上あげた鹿児島県南部の石器から見ると水田用と陸耕用との二種あつたことは明瞭であるように思われる。

東京大学考古学教室の中川成夫氏は「農耕が水田耕作だけであつたかどうかは今後の調査研究にまつほかはないが、発達史的にかんがえても陸田耕作はあつたにちがいないと思われるし、また最近の報告によると各地の彌生式遺跡から麦が出ている事実がある。私達もさいきん大隅地方で高地の彌生式の集落地を調査したが、そのときこゝにも陸田もあつたらしい形跡をたしかめえた」と述べられている。¹⁴⁾

種子島には中種子の陸耕遺跡と考えられる遺跡から稲実痕を有する彌生式土器片が発見されている。その詳細については後述したい。

尙、種子島西之表安納ではチピカルな陸耕用石器を伴つた遺跡を調査することが出来た。陸田作物になにがあつたかは十分にはわからないが、粟、稗、陸稻等の可能性が考えられるのではなからうか。然し、陸耕作物の発見例は殆んどないといつていい。僅かに、半島南部指宿市十二町の丹波小学校附近の先史遺跡から指宿高等学校の生徒小林修君が小型の彌生式壺の底部に稗のはいつたものを発掘しているが、これは稗が早い時代の栽培植物であつたことを語る例として興味深い。稗は薩南に於いては粟とともに近代迄常民の常食とされていたものである。

陸耕用石器を伴う彌生期の陸耕遺跡についての知見については極めて乏しいが、信州飯田地方の天龍川河岸の台地上の畠地に見出されている彌生式遺跡にかなり豊富に発見されるチピカルな扇状形有肩石斧の如きも陸耕用具に違いないと思つている。

稲作に関係する石器として注目されているものに石庖丁がある。この石庖丁は極東新石器に特有な形式でその発祥地は未だ知られていないが年代は北支那の殷代以前から日本の彌生式時代に迄及んでいる。その分布は北支那、朝鮮、日本に見られ、江南には発見されないと考えられていたことから、我が国稲作は中国北部文化圏の影響によるものであらうとする見解が導き出されていたものである。然しながら石庖丁が華北で盛行したのは非常に古く、日本の彌生期初頭に当る時代には既に鉄製品が使われている。日本に於いて彌生式土器に伴う青銅利器の年代は紀元前600乃至700年以前に溯り得るであらうとされている。¹⁵⁾ 日本に於いては石庖丁は

青銅器と共存して盛行しているのである。従つて石庖丁の日本に於ける盛行期は華北に於ける盛行期に比して時間的に大きなずれがある。従つて大陸系稲作が石庖丁を伴つて入いつてきたとするなら大陸に於ける石器使用が尙継続していた後進辺境地方からはいつたものであることを注意する必要があると思う。

石庖丁は華北圏に於いてのみでなく、後進地方である江南に於いても発見されていることは注目すべきであろう。石璋如氏の「鋤頭下の蒼洱与中原」¹⁶⁾によると、華南蒼洱境では半月式の刀類が流行していることがわかる。その刀類というのは石庖丁と考えられる。その形状は華北所産のものに似ているが開刃法が相違するといふのである。石氏引用の呉金鼎氏の考察は次の如くである。「此次在蒼洱境発見之史前文化、其本質頗異華北之仰韶龍山兩文化。雖与華北文化不無關係、而地方色彩甚重、最顯著之特点、即断線压紋陶与半月形石刀。断線压紋陶在華北少見、今日所知者、只甘肅及熱河有之、而蒼洱境則極為發達、佔飾紋陶之一重要部分。半月形石刀開刃法、蒼洱境与華北不同。以弓為喻、華北刀刃開於弓弦、蒼洱境所出者刃開弓背。在応用上華北式適於割、蒼洱式適於切。此種文化生長山地、進化遲滯、及遷至平原、乃大量接受漢族及印度文化」。

尙華南系石庖丁はマレイの Pahang の Tembeling 河地方からも発見されている。雙孔を有するものである。全上遺跡からは靴型石器も発見されている。¹⁷⁾ 発表者の Tweedie 氏はこの雙孔の石庖丁が如何なる意義を有する石器であるかにはふれていないが、この発見は石庖丁が意外に広く東南アジアに分布していることを示す例として注目すべきものであると思ふのである。

海南島、フィリピン、ボルネオ等に於ける稲の穂づみ器具は木製柄に鉄製刃をつけたものであるが、刃形は石庖丁に相似したものである。然し刃器に直角に短い柄を装着しているから、穂づみをする時の刃向は石庖丁の使用の場合とは異なる。¹⁸⁾

森本六郎氏によると北九州に於ける最も古式の彌生式土器である遠賀川式土器に随伴する石庖丁は半月形のもので刃部は弓背につけられたもの一式に限られているといふ。¹⁹⁾ 所謂華南の「刃開於弓背」の形式のものであることは極めて興味深いといわねばならない。尙森本氏は南九州にはいると氏の所謂中間型（刃部直線式即ち刃開弓弦の華北式）が主体形態をなすといふが、私が見た南九州例についていふなら華南式が優勢のようである。

朝鮮に於ける状況はよくわからないが、藤田亮策教授の「朝鮮の石器時代」にかかげられた平壤附近出土のものは「刃開於弓背」の華南式とその移行形式を示すものである。

西鮮の有段石斧には鹿野忠雄博士の所謂クルムデクセル型と偏平型と両様が共存している。これらは華南式石庖丁と相まつて華南系稲作とともに華南系石器文化が西鮮に及んでいることを語っていないであらうか。朝鮮半島には東南アジア系の石器としては有肩石斧が知られている。殊に南鮮にはチピカルな靴型石器が知られていることも東南亞細亞系石器文化の波及を考へる上に注意しておいてよい資料であると思ふ。

尙、江南地方と我が九州及南鮮地方との關係を暗示するものに甕棺埋葬がある。梅原末治博士は「日本考古学論攷」に於いて中支出土の甕棺について述べられ、「上述北九州に多い古式の甕棺が古く中支揚子江に近い一部にも行われたとの想定に導くと共にこの甕棺なるものが本来支那人の墓制でなかつたことをも推測せしめて遺跡の源流を考へる上に重要な示唆を与える次第である」とされている。然し尙「甕棺の分布が内地では主として北九州であるが南九州に及び一部分支那にも行われている点からすると或は南方の色彩があるのでないかと想像せられ

る。但し現在の所ではこの想像を証拠立てる程の資料はない」と附加されている。

甕棺埋葬が部分的には華北にもある。山西省唐山市賈格莊に発見された六基の小児の甕棺墓は春秋時代に営まれたものと推定されている。²⁰⁾ 如何る系統に属するものかは不明。華北に特例があるとしても、この種埋葬が、東南亜細亜に一般的に広布する習俗であることはやはり注目されなくてはならないと思う。²¹⁾ 揚子江附近の甕棺埋葬は東南亜細亜系先住者の埋葬習俗を示すものと考えるのが最も自然であると思うが、南鮮九州の甕棺埋葬又同系のものでなからうか。そして南鮮及九州の甕棺埋葬は江南系の稲作を伝えた人々の習俗と深い関係をもつたものでなからうか。

次に方向をかえて靱痕資料について若干の新知見を述べてみたい。

森本六爾氏が日本原始農業新論に掲げられた彌生式農作物関係発見地名は65ヶ所に及び、彌生文化に於ける最も普遍的な石器の一である石庖丁の発見地数とほぼ匹敵する程の数に上つているが、その中で九州の例は13例あげられている。稲実の圧痕を有するもの、焼米、藁の圧痕をとどめるもの、窯壁に藁を入れている例等が知られている。然しその中の7例迄は筑前国発見例、筑後発見例は3例、肥前発見例は2例あるが、肥後以南には肥後下益城郡隈庄町下宮地字安幕出土のもの1例があげられているに過ぎない。「所謂肥後重孤文土器に属する壺型土器の肩部に明瞭な藁の圧痕がある。実見」と註記されている。

以上の他にも、樋口清之教授は「昭和17、8年にかけて自分は鹿児島県薩摩半島西部地方に於いて比較的古式に属する彌生式土器で靱痕を印する事実を確認する事を得た」と述べておられる。²²⁾

稲実或いは靱痕の発見例は森本氏の時代にしたら、今日では多数の新事例が判明しているであろう。南九州に於ける発見例については筆者は寺師見国氏、河口貞徳氏、北園博氏、盛園尚孝氏の採集例を実見することが出来た。以下にあげる靱痕例には陥入の際のすれこみを示している例はない。

寺師氏の資料は次の諸例である。

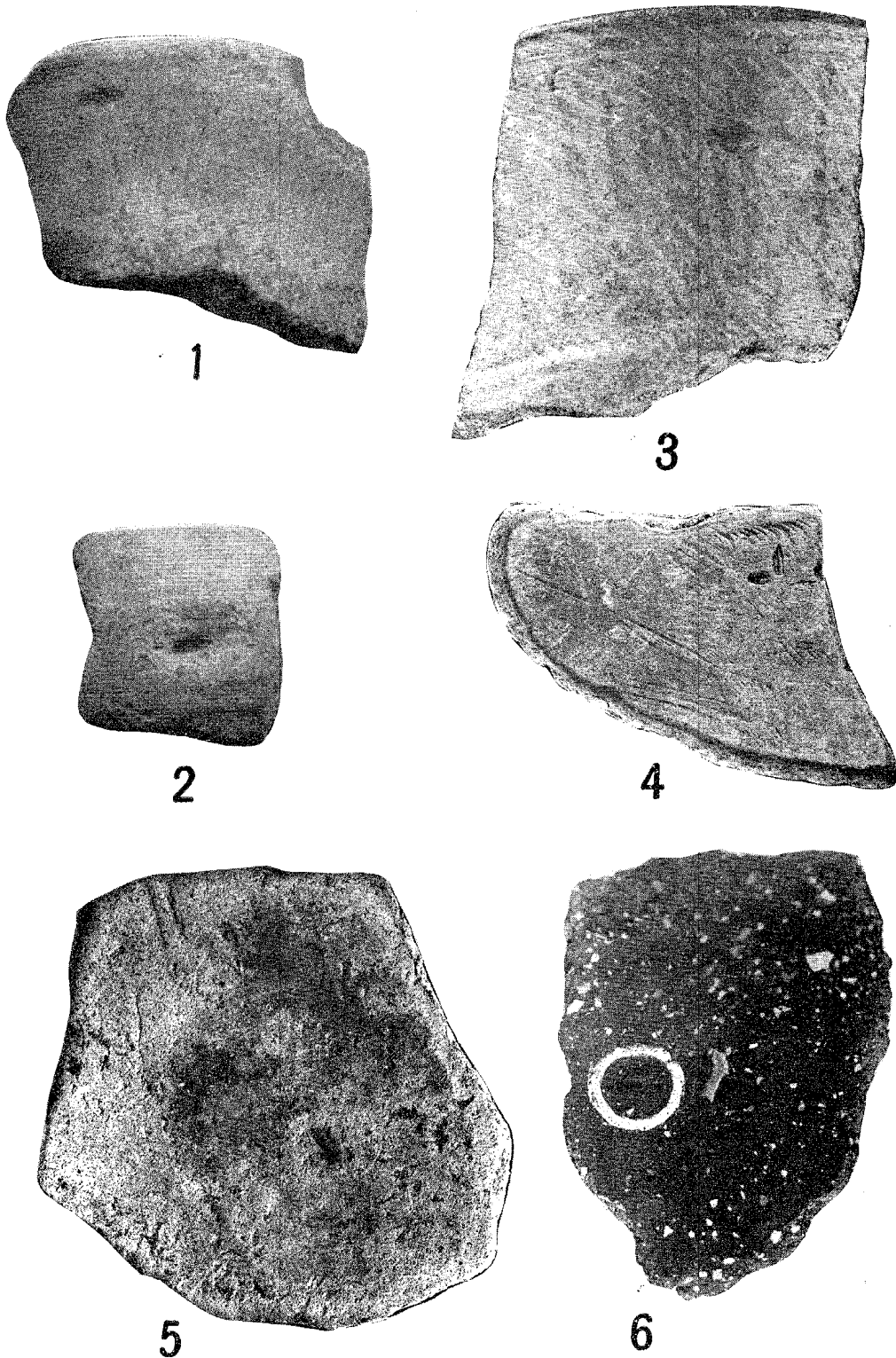
(1) 肥後水俣初野貝塚出土の彌生式の高塚型土器の口縁裏側に明瞭な靱痕を止めている。芒のあとと思われる痕跡をとどめているので有芒の種類であつたと思われる。縦長6mm、幅.35mm、縦長と幅の比は1.74(図版3図参照)寺師氏によると初野貝塚の立地する地帯は畑を主とした台地であるが、貝塚は畑地の傾斜面に営まれているという。貝塚より10m乃至20m以下は谷地となつていて、現在田地となつていと云う。

(2) 全上貝塚出土の彌生式土器々壁の内側胎土に靱痕と思われるものを留めている。縦長7mm、幅不明、厚さ2.1mm、靱の陥入のし方によつて幅の計測が不能であつた。(図版5図参照)

(3) 全上貝塚出土の彌生式土器々壁の内側胎土に靱殻と思われるものを留めている上に器壁面上に稲の葉跡と思われる痕跡を留めている。(図版4図参照)

(4) 大隅栗野町北方の彦崎出土の彌生式土器の口縁外側に靱痕をとどめている。縦長8mm、幅3.5mm、縦長と幅の比2.28、(図版1図参照)寺師氏によると北方(キタカタ)は川内川より300m乃至400m離れている。附近に古墳あり、山地の傾斜面で畑地をなしているが、南方は割合広い盆地となつていと云う。

(5) 薩摩大口市出土の土師器の口縁内側に靱痕を留めている。縦長7mm、幅3mm、縦長と幅との比2.33、(図版2図参照)寺師氏によると、遺跡は広い盆地に位置し、靱痕をとどめる土器は水田の地下凡そ1m下の包含層から出土したと云う。



Rice marks printed on the pottery fragment.

- (1) A fragment (Yayoi type) found at Hikosaki, Kurino-Machi, Kagoshima Prefecture.
- (2) A fragment (Haji type) found in Ohkuchi City, Kagoshima Prefecture.
- (3) A fragment (Yayoi type) found at Hatsuno, Kumamoto Prefecture.
- (4) Ibid.
- (5) Ibid.
- (6) A fragment found in Ishigaki Island.

以上の中初野第1例はチピカルな短型の稲実と思われるが、栗野彦崎出土例と大口出土例は縦長と幅の比何れも2以上にして、やや長型の稲実を示している。

以上の中、栗野彦崎例は地形的に見て陸稲の可能性はあるが、大口例は水田に作られたものであると思われる。とするなら水稲中にもやや長型が見出されることになる。

次に河口貞徳氏が示された例は次の如くである。

(1) 薩摩上伊修院村東昌寺遺跡出土遠賀川式土器々壁にほゞ明瞭に粃痕をとゞめるものがある。縦長6.3mm, 幅3mm, 縦長と幅との比2.1, 全遺跡は台地上の遺跡であるが, 下方は現在水田地帯である。

(2) 鹿児島市一宮遺跡は彌生式後期に属する遺跡であるが, 全遺跡出土の鞆の口部残片に多数の粃殻痕をとゞめている。その中やや明らかに痕跡を示すものが一例ある。縦長6.5mm, 幅3mm, 縦長と幅との比2.16, 一宮遺跡は扇状地形に営まれた遺跡である。以上の中, 一宮例は粃殻痕なるために形状は明確だとは云い難いが大体に於いて長目のもののように思われる。

次に北園博氏採集例は次の如くである。

(1) 大隅高山町瀬戸宇治原出土の彌生式高坏の脚部外面に粃圧痕がある。縦長6mm, 幅3mm, 縦長と幅との比2.0, 北園氏によると瀬戸宇治原は高燥な台地であるというが, 東西両側に細長い浸蝕谷があり水田化されているという。

(2) 全上遺跡出土の彌生式壺型土器底部内側に粃痕に酷似するものが見られる。但し粒頭の部分に異物はいつた跡をとゞめている。農林省指宿試験場ではビルマ稲を栽培していたが, 比較するとそのビルマ稲の稲実に酷似していた。然し油粘土を入れて型をとつてみると, 粃特有のふくらみがなく, 又粃殻の上にある二条の組織が平行していることが判明したので, この資料を粃痕資料として扱うことに不安があると考えた。

(3) 全上遺跡出土の凸帯を有する彌生式土器片の内側に粃痕がある。縦長6.5mm, 幅2.5mm, 縦長と幅との比2.6強, 長型を示している。

尚薩南知覧町から稲実の圧痕を有する彌生式土器の出土していることを採集者の折田直実氏から聞いているが未見である。

以上は肥後, 薩摩, 大隅に於ける筆者の実見資料について記載したが本土を離れた南島に於ける例は種子島の中種子に於ける盛園尚孝氏の採集標品2例と石垣島採集例1例を挙げ得るに過ぎない。

(1) 中種子田島の輪之尾出土の彌生式土器々壁にやや斜にはいつていたと思われる圧痕が見出される。一部欠損しているが大体は計測出来る。縦長7mm, 幅3.5mm, 縦長と幅との比2.0, 興味深いことは同標品の出土せる遺跡は現在畑地にして, 稲は陸稲が作られている。地形的に見ても水稲の適地を見出すことは出来ない。従つてこの稲実痕は陸稲の稲実痕と考えられる可能性が強い。

(2) 中種子坂井本村出土の彌生式土器底部内側に粃痕が見られる。縦長6.5mm, 幅3.5mm, 縦長と幅との比は1.85強, この地域は水田地帯であり, 恐らく早くから水稲作の適地であつたと考えられる地形を示している。

以上2例の中, 前者はやや長型にして, 後者は短粒の日本型を示している。

石垣島出土例については上述した所であるが, 粃痕の実測数値についてあげると次の如くである。

縦長8.0mm, 幅3mm, 縦長と幅との比2.66強, 即ちチピカルな長型である。(図版6図参照)

以上の他に従来に於いて、長型の稲実痕を示す例としては樋口清之教授が三河稲荷山で得られた2種は著名である。樋口教授によると、その2種の平均値は長さ8.30mm、幅3.30mm、長さとの比2.52を示すという。

以上西貢日本に於ける稲実痕を通しての調査では型の上では典型的な日本型もあるが、それよりもやや長型、即ち典型的な日本型と長型の中間型が多い。その上長型もあることは興味深い。即ち型の上では変異の幅がかなりあるのである。

現在の日本米の型が非常によくそろっている事と対比して考えるなら、古代に於いては形態的に変異の幅が相当にあつたものが非常に改良が加えられて一定の型に統一されたものであることが考えられるわけである。

このような事情は上引の「古代出土米」写真集の標品例を通して同様に考えられると思う。さきに赤米について追究した時、トボシ系の稲が古くから存在したものでなからうかと推定したが、古代に於ける長型の存在を乏しいながら明らかにしたので、以上の推定にも十分だとはいえないが、傍証を与え得たわけである。栽培稲に日本型変種以外に長型の変種のあることから、筆者は古代に於ける稲実の型に注意し、トボシ系赤米との関連をつかもうとしたわけである。

(四)

日本古代に温帯島嶼型のみでなく、南方種も共存したとするなら、それらはいかなる故郷から、いかなるコースをとつてきたものであろうか。

既にさきに石庖丁との関係に於いて華南との関係にふれたが、稲の上からするなら日本古代の稲と中国の稲とは如何なる関係をもつてくるのであろうか。

中国に於ける赤米を追究してみるなら、中国古代に於ける稲品種の一部が浮び上がつてこないものであろうか。

晋の郭義恭の広志に「有虎掌稻 紫芒稻 赤穠稻 白米稻 南方有蟬鳴稻」と見えている。以上は色についての記載であるが赤穠稻というのは赤米でなからうか。

唐の陸龜蒙の誌に「近秋炊稻識紅蓮」とある。炊稻が紅いというのであるから赤米に違いない。近秋は晩夏のこととするなら早熟の稲であることを考えさせるのである。

杜甫が四川と湖北の省境夔州に滞在した時の詩に「落杵光輝白 除芒子粒紅」とある。子粒紅とあるからには赤米が意味されていると思う。宋の法賢の訳した金剛薩埵説頻邦夜迦天成儀執法卷二には「用秬米作頻邦夜迦天像 用密灌於像腹 復用紅秬米作自妻形」と見えているが、秬は粳で即ち不粘の稲米である。即ち紅色の不粘稻の記載を見出したわけである。

子粒が紅なりや否やは不明であるが、不粘の稲は早く漢代にあつたとは説文に「穠稻紫莖不黏也」とあるからわかるのである。

尙他に文献によると秬と称する粳米が古くからあつたことが知られている。魏の張揖撰の広雅に「秬粳也」と見えている。梁顧野王撰の玉篇には秬、秬は秬稻なることが見えている。秬の性質を比較的詳記したものは宋の羅願の著爾雅翼で秬を粳より小粒なりとして「今人以黏為穠 不黏為秬 又有一種曰秬 比於粳小而尤不黏 其種甚早 今人号秬為早稻 粳為晚稻」とある。普通の粳米に対して秬米を異系のものとして扱っているのである。

安藤広太郎博士は爾雅翼の記載と明の徐光啓の著農政全書中の秬と粳の区別についての記載例をあげて、粘度及粒形によつて粳と秬とを区別して呼ぶに至つたのは宋時代又は之より少し

く遡つた頃からではあるまいかと述べ、又註記して宋の真宗が西暦11世紀始め頃福建省より占城稻を取寄せて普及せしめた頃よりこの区別が一般化したのではないかとも思われると述べられている。²³⁾ 適切な説であると思われる。然しながら華南系の早稻が宋時代又はこれよりやゝ遡つた頃から華北に行われたと考える必要はないのである。秈は音の上で占城の占に相応じるものであろう。従つて中国古代の秈稻も華南系の早稻を意味したものと見てよいのではなからうか。

北宋の初期、揚子江沿岸地方が屢々旱害に遭い、水田の収稻乏しきに苦しんだので宋の真宗の時代に福建省より占城稻の大移入が行われたことがあまりにも著名であるので、南方稻の華北への広布はそれ以後のものとのみ考えられる恐れがあるわけである。

中国に於ける稻の古音について松本信広博士は沛国(今の安徽省江蘇の北)では、古く *niwán* という音であり、又江蘇の南部では善稻を *i'nuán* とよんでいたとして、それが印度支那の安南の *n'èp* カムボジアの *niop*, *Sedang* の *nian*, *Buhnar* の *banan* に関係ある如く考えられる。また朝鮮古代語形にも *ni* という稻を指す形があつたとのことであり、何れも我が国のイネと云う語の淵源を指すものとして興味深いと述べられている。²⁴⁾

現在中国で用いられている *tau* 或いは *tao* もまた仏印系の言葉に関係あるようである。それらは安南語の *gao* 及びモン語の *kaw* と近縁関係をもつていようであるから²⁵⁾ これらは中国の稻の系統を考える上に興味深い手がかりとなるのであろう。古代中国の米に秈米があり、秈米があつたことは、中国に於ける初期の稻作者が東南亜細亜系の華南先住者であり、技術とともに品種も早く伝播されていたがためであろうと考えるものである。

然しながら長い間には環境による形態の変異のおこることも考えなくてはならない。

松尾孝嶺博士は栽培稻に関する種生学的研究に於いて、草型により **A, B, C** の三型を分類された。日本型米は **A** 型に属し、粳は丸味を帯びる。東南亜細亜では **C** 型の米が多く、粳の型は細長い。**B** 型はその中間ともいふべきであるという。博士によると華中では **C** 型から **A** 型迄広く連なる品種が存在し、**A** 型及び **C** 型各々について、階級の高いものから低いものに至る迄見出されるという。台湾の **A** 型品種が多く日本渡来の品種であることより、これを除くと、外国種の中では華中の **A** 型品種が日本水稻の起源や伝播を考える上に重要な示唆を与えるものとされることは注目すべき発言であると思われる。²⁶⁾ 華北にも **A** 型はあり、又秈稻があつたとするなら **C** 型もあつたわけであるが、現状に於いては **B** 型が多く見出されるようである。²⁷⁾ **B** 型は岡博士の熱帯島嶼型に当るものである。

華南についていえば、秈系の稻が最も一般的であろう。歴史上の文献の上では十分に明らかにしえないが、宋の楽史の著「太平寰宇記」の第百巻江南東道の十二に南劍州(今の福建省南平県)の土産として「稻有一十一種、金黍、赤鮮、白稔、先黄、金牛、青龍、虎皮、女兒、狭糖、黒林、先白」と見えている。赤鮮とあるは赤米であろう。又全巻百五十八の二に潮州では「稻得再熟」とあることは興味深い記事で華南の稻作が熱帯型の二期作であつたことをいつているわけであろう。

南鮮、北九州に大陸系の稻作が伝来される場合に、風土的適性からいつて、華南の熱帯二期作型の秈稻より、**A** 型品種がより好ましいものであつたであろう。彌生期初頭以来の北九州を中心とする速やかな普及を考えると、適性の品種がもたらされたと考えるのが妥当だと思われる。上述の農林省稻作史研究会の「古代出土米」の研究がこの想定をある程度裏づけているといえよう。

然しながら長型の証跡がないわけではなく、殊に三河、南九州から南島の一部に先史時代から歴史時代初期にわたる資料があり、尙現に長型のトボシ系稲がある。南島についていえばA、B、C三型が共存するという事情は黒潮コースのもつ意義を無視することを許さないように思われる。

本項に於ける中国関係文献については金関丈夫博士の御教示を受けることが大きかつたことを明記したい。

(五)

稲作には普通朝鮮—日本という移入ルートが考えられている。従つて日本に於ける移入の問題を考えるためには、朝鮮に於ける事情を考慮しておく必要がある。朝鮮に於ける事情を考えるためには、稲作と関係の深いと思われる彌生式系土器及びそれと共存関係を示す石器について考えることから始めたい。

朝鮮史前遺跡発見の土器は藤田良策教授によると、第一は厚手無文式土器、第二は薄手櫛目文土器、第三は丹塗土器及彩色土器、第四は新羅焼式土器となつてゐると。²⁸⁾

以上の日本の彌生式土器と関係深いものとされているのは厚手無文式で、日本の彌生式土器はその進歩した形式に属するとされている。横山将三郎氏はこれを文化主体という観点から考察すると二つの類型に綜括しようとして彌生式に似通える土器を第一型、櫛目文土器を第二型とする。そして形式分類によると第三、第四は第一型に所属するとされる。²⁹⁾

そしてこの第一型土器に挟入石斧の伴出や石庖丁の共存が見られ、又粃痕が見出されている。³⁰⁾ 然して第二型土器には石皿石棒が発見されるが、この種類のもは第一型土器には伴出しないとされることは興味深いことで、横山氏はこれによつて両者間の穀物の種類の相違があつたことを想定されている。恐らく華北満州系の高梁、麦の如き粉食性の作物と西鮮殊に南鮮に盛行した稲との二種があつたと見てよいであろう。

稲作は中国本土では前漢に至つてその都長安を中心とする陝西地方に盛行し、後漢にかけて灌漑政策が著しく発展して中央政府によつて稲作奨励が行われた故に、稲に対する社会的嗜好が向上し、その社会的進出を見たのは後漢以降であろうとする岡崎文夫氏の所説に従つて、横山氏は稲作の半島移入を遅くとも楽浪郡設置頃と見て差支えないとするのである。然しながら日本に於ける彌生式の最も古式の遠賀川式土器に粃痕を伴うことを考えると、朝鮮に於いても楽浪郡治を通しての漢人による移入に先立つて稲作が始まつていたと考えてよいと思うものである。

既に秦末漢初の中国全土の大動乱のために、燕、趙等より朝鮮に來投するものあつたことを考えても稲作の伝來される機会は早くあつたと思うのである。

恐らく西鮮にはいつた稲は中国東南沿海を北上したものがもたらされたものでなからうか。

³¹⁾ 日本に於ける稲作移入の一つのコースは西南鮮にはいつたものが南鮮から北九州に間もな及くんだものとするものである。

安藤広太郎博士は我が国への稲の伝來コースとして江南地方海岸より東して対馬海流によつて我が北九州或いは南鮮に來ることは支那大陸と本邦との間の最短距離であり、他の経路に比べると危険も少く集団的移住が容易に行われ得るから最も重要であるとされるが、私は博士のこの説が、江南から一直線に、支那海を横断してくるものとするなら、それはやゝ困難なコースと思わざるを得ない。遣唐使の場合を考えても、はじめは海峡を横断して朝鮮半島の沿岸を

北上して渤海湾に出ている。支那海を横断して揚子江岸に上陸する南路をとるに至つたのは新羅との関係が悪化して沿岸コースをとれなくなつたからであつて、航海術の幼稚な時代、危険は前者に比して遙かに大きかつたわけである。

稲作の伝来とは単に技術の伝来を意味するものとは考えられない。技術の伝習ということが容易なことでないことを思うと、稲作技術をもつた生活者が渡来したと考えるのが最も自然であると思われる。

古墳時代以後、移住者が集団的に渡来し、それぞれの専業に従事したことは知られているがそれに類似した移住が一規模は小さくとも一縄紋式文化期の終末期に於いてあつたのではないかと思ふものである。云いかえるなら稲作の如き有力な農作技術をもつ相当量の移住者を受け入れる事によつて、縄紋文化時代の終末がきたといつてよいと考えるものである。

小林行雄氏が「もちろん今日では彌生式文化のことごとくが新しい移住者のみの手によつて経営されたというような考え方は成立する可能性が乏しいが、彌生式文化の興起するために、その主導者として縄紋式民族とは異つた移住者のある程度の量を想定することまでも否定されたわけでない」³²⁾といわれているのは重要な発言であると思ふのである。

1953年以降金関丈夫博士、小川五郎氏、坪井清足氏、金関怒氏らによる山口県豊浦郡土井浜の遺跡の発掘が行われ、多数の彌生式期人骨が発見されている。森貞次郎氏によると、人骨層との関係をもつ土井浜の土器は北九州の様式を基準にしていうなら、彌生式前期末の様式であると云う。発掘調査は今後も継続されるというが、昨年度迄の結果は昨年10月30日京大人文科学研究所に於いて開かれた考古学会で発表された。その際金関博士は土井浜発掘の人骨による彌生式時代人の身長を日本石器時代人、日本古墳時代人、現代北九州及びその附近、現代対馬及び南朝鮮に於ける身長の計測平均値との比較を試みられ、重要な発言をされたが、同様の内容のものが日本考古学講座の第4巻彌生期の「人種の問題」に於いてかゝげられている。

「彌生文化ととも、頭長、頭幅、頭長幅示数の点では、日本石器時代人と大差ない、しかし、身長点では遙かに後者を凌駕する、新しい種族の相当の数が、新渡の種族として日本島に渡来し、北九州地方のみならず、畿内地方にまでひろがつた。しかるに、これにはその後ひきついて渡来する後続部隊がなかつた。またその数においては在来の日本石器時代人に比して、遙かに少かつたから、時代を重ねるととも、その特異の形質、すなわち長身が、しだいに、在来種の形質の中に拡散し、吸収されて、ついにその特徴を失うに至つた。」

「こうした長身の新しい種族が日本島以外の、どこから渡来したかの問題がある。もし身長のみについて論ずるならば、そして、もし身長点で、古代の南朝鮮人と現代のそれとの間に大差がなかつたとするならば、その候補地としてまず挙ぐべきは、この地方である。」と。

この発表は重大な意義をもつもので、南朝鮮を経由して相当量の移住者があつたであろうことを示すものとして注目しなくてはならないと思われる。勿論、土井浜に於いては土器の様式から見ても彌生式初頭以来若干の時間の経過が考えられるわけであるが。

縄紋期の終末期に南朝鮮から渡来者があつたとすると、稲作伝来の可能性が想定される。彌生式時代の開始とも稲作が急に始まつたことを思うとこの想定は不当ではなからう。次に渡来が海峡を越えてなされたことを考えると、渡来者は単なる農耕生活者と見ることは出来ないと思ふ。恐らくは海に關係深い生活を一面に於いてもつていたと考えられるのではなからうか。その生活型として、私は半農半漁の型を想定するものである。

それにしてもしそのような移動が容易でないことを思うと、移動を促す上の強力な刺戟があつ

たはずだと思われる。そしてそれには動乱による政治的社会的不安の如きが作用したという事情は考えられないものであろうか。³³⁾

江南系の稲作が江北に及び西南鮮を経て北九州に至るとする想定を導き出したが、江南系の稲作は島嶼にはのびていないであろうか。江南に最も近い台湾本島について見るに、台湾本島には大陸文化が江南を経てはいつていることは確かであると考えられる。末流の感はあるが彩陶、黒陶は台湾本島西海岸に及んでいる。格子目の印紋土器の中にも華南系のものがあると考えられる。石庖丁はそれら大陸系土器に随伴して広く、且つ豊富に発見される。石庖丁以外に石鎌の盛行が見られる遺跡もあげることが出来る。有肩石斧、靴型石器、有段石斧等の盛行する遺跡も見出される。そしてそれらの様相は中国東南沿海地方の様相に似ている。以上の事情から考えて台湾先史時代には大陸系の稲作が伝えられているものと見てよいであろう。然し台湾先史時代には尙南方系の粟作と陸稲作がはいつているように思われる。

南島の先島の一部と台湾本島との間に先史時代に於いて交渉があつたことは、波照間に於いて台湾本島北辺に現在でもいるケタガラン族の土器と同系統の土器が発見されたことからしても推定出来ることであるが、江南—台湾系の稲が南島に及んでいるかどうかは不明である。与那国、西表島の調査が出来ていない今日、断定は出来ないが、与那国、西表島を除いた主要な島々での知見によると、江南—台湾系の先史文化的要素は今の所全く見出すことが出来ないで、江南—台湾系の稲作文化は南島には及んでいないのであろうと今の所考えるものである。

中国東南沿岸地方、西南鮮、西南九州、台湾一主として西海岸—にかけて先史文化の上に共通して彌生系の農耕文化に関係があると思われる要素が見出されるのに、支那海沿岸をとりまく一環をなす南島の島々には、同様の要素が見出されないことは注目すべきであろう。

然しながらこの彌生系農耕文化に関係ある要素が欠けている南島の島々は、黒潮コースを南から北へ、かなり濃厚に南方的要素をもつていることは興味深いことである。

(六)

南島への関心は従来一般的には高かつたとはいえないが、近年次第に注目されつゝある。近年に於ける調査例をあげると、1952年2月に三友国五郎教授によるトカラ諸島一帯のサーヴェーが行われている。全年夏には三友教授、河口貞徳氏及び筆者による種子島、屋久島による調査が行われた。種子島の西之表及び屋久島の一湊に於いては発掘が行われた。1952年夏には三友、河口二氏と盛園尙孝氏及び筆者による口永良部島の発掘調査がなされた。尙1953年以来、柳田国男先生の下に南島文化の総合調査研究団が組織され、1954年3月から5月にかけて、金関丈夫博士、酒井卯作氏及び筆者による沖繩本島、宮古、石垣島、竹富島、波照間島のサーヴェーと波照間島下田原遺跡の発掘調査がなされた。又1954年6月はじめに、河口貞徳氏による大島本島宇宿の試掘と大島群島一帯のサーヴェーがなされ、8月には三友教授、重久十郎氏と筆者による徳之島調査がなされた。又全夏、馬淵東一教授による宮古島調査がなされている。

以上の調査によつて判明している所をあげると縄紋式土器は沖繩本島を南限としているようであるが、大島、徳之島に見られる口縁波状を示す一片が波照間島の浅い包含層中から得られているから、縄紋系の影響が本島以南に皆無とするわけではない。

又彌生式土器は三友教授によるとトカラ諸島中の臥蛇島に見られるというから、今の所臥蛇島をもつて南限としていると考えられる。然し、酒井卯作氏が久米島から彌生式末期のもので

ないかと思われるものを採集されているから、将来久米島の状況が明瞭になるなら彌生系の南限はのびるわけである。

又祝部式土器は南方では石垣島に及んでいた。但し西表島、与那国は未踏査であるので、それらの島の調査が進むなら祝部式土器の南限は更に南方に拡げられるかも知れない。

盛園尙孝氏は1954年6月の鹿児島県考古学会に於いて種子島の彌生式文化について次のように発表された。

「彌生式になると島の文化の発展は停滞の跡がはつきりしていて、本土の水田耕作の発展に比べ尙狩猟採集を主とする粗放的農業で場所によつて稍先進的稲作農業が見られるに過ぎぬ。土器は一応本土と同じような標準的なものであるが全体として未分化で編年も簡単で生産内容も縄紋時代と変つていないと思われる」と。

盛園氏の発表は極めて興味深いものであるが、同様の事情は鹿児島県半島部に於いても見出される。筆者の主として調査したのは薩南であるが、彌生式の分化は殆んど見られず、然も後期的様相を示すものが祝部式と共存することは彌生式の半島南部への進出が非常におくれ、その時期が古墳期に及んでいて、文化の上では彌生期末葉のものを伴い進出したと見るような様相を示していると思つてよいと思つたのである。トカラ諸島の彌生式土器は三友教授によると末期的特色をもつとされることは、薩南の状況から考えて最も自然な様相として受けとられるわけである。酒井氏採集の久米島土器がやゝ新しいものとしても、或い祝部式土器にもなつたものでなからうか。祝部式土器は大島から沖縄本島、八重山にかけても発見されることからして、南島の稲作の中には南九州、種子島を経由して本土系のものが祝部式土器ともにはいりえたと考えられる可能性があるように思われる。然しそのようにして、内地系の稲作を受入れたとしても、技術の上では内地系の技術をそのままには受け入れたのではなかつたらうと考えるものである。品種に於いて内地系のものが受け入れられたとしても技術の上では島嶼的な技術が行われてきたものでなからうかと考えるものである。

それなら島嶼にはいかなる生産事情があり、その技術とはいかなるものであつたか。南島にあつては酷薄な表土をもつ珊瑚礁に圍繞される島が多い。そのような島では耨耕が支配的である。豊富な水利をもつ島は特定の極めて一部の島を除いては乏しい。大部分の島が農耕のみには頼れず、漁撈、狩猟をも兼ね行つた生産型を維持してきたようである。農業生産の技術については先史時代から今日にかけて連綿として変らない技術が伝えられているように思われる。

波照間島下田原の先史貝塚から出土する火度の低い厚手の土器は直接彌生式文化に結びつかない。この種の土器は石垣島、竹富島、沖縄本島にも分布する。横耳形把手をもつ八重山系土器の北限は大島群島中の徳之島である。下田原出土の粗造石器—恐らく陸耕用石器—は八重山一般に見られるが、現在同系のものが沖縄本島の縄紋式石器中にも見られ更に北方に及んでいることも上述した。耨器として使用されているピラと称されている鉄製品は耨耕用と考えられる石器と酷似していて、鉄製品は石器の遺型と考えられるから、先史時代の耨耕は金属使用の時代にかけて、そして今日に至るもその形をさして変えていないといえるように思われる。

然して更に注意を要するのは琉球諸島から薩南諸島にかけて存在する水田耕作の技術である。それは犁を用いず、家畜をして水田を踏ましめて、適当な状態を作り、その上で播種するものである。

筆者はこの耨耕による陸田作と家畜利用の水田作との二つの技術がともに南島に於ける稲作

技術であつて、日本内地系の技術と異なるものであると考え、これを島型稲作とよばんとするものである。

島型稲作について文献上にその証拠をもとめんとするなら15世紀末の状況を記載した文献があることは上述した。15世紀末に於ける朝鮮済州島民の琉球漂流の見聞を載せた成宗大王実録である。全実録記載の見聞録は金翽丈夫博士が九大所蔵の実録によつて副写を作成して惠贈して下さいたので、その詳細を知ることが出来た。

済州島人の漂着した閩伊是歴は与名国と考えられるが、全島の生産についての記載はまことに興味深いものがある。

有鉄冶而不造耒耜小鍾剔田去草以種粟水田則十二月間用牛踏播種正月間移秧不鋤草二月稻方茂高一尺許四月大熟早稻四月畢刈晚稻五月方畢刈刈後根莖復秀其盛愈於初七八月收穫未穫前人皆謹慎言語亦不厲声不感其声甚微細。

こゝには耨耕による陸耕と家畜に踏ませる水田作とがあることが語られている。後者については全上漂流者の記載中沖繩本島の条にも見えている。

そこに語られている稲作はまさに熱帯型の二期作である。収穫前には人みな謹慎してものを云うにも声をひそめて云うというのは穀霊を驚かさなためであろう。穀霊についての信仰には南方の稲作住民に共通するものが見出されることは興味深い。

家畜に踏ませる方法については宇野円空博士が「マライシヤに於ける稲米儀礼」に於いて注意されている。

「最も簡単な耕耘の方法としてはマライシヤでは往々家畜を田畠に入れて土を踏ませる。これまた余り学者の注意をひかなかつたけれどもその棒耨耕作に及ばない簡単な方法にも拘らず耕作の発展段階としては重要な一形式であつて家畜の糞便は多少の肥料となることも無意識には耕作上の効果を加えているであろう。その家畜もマライシヤでは大部分水牛か牛であつてタイムル島パンカ諸島、スマトラでは多く南部西海岸地方に、ジャワでもバンタム地方に多く見られる。ボルネオでもサラワク地方のカラピツ族や沿岸部のクレマンタ諸族は水田を作つてこれを水牛に踏ませる。またこの方法は川田、沼田の深さも適当で数回くりかえして作られるところや、その他雨水田灌水田に於いても初期の耕作法として性質上多く水田に採用されるのであつて、畑作では常耕畑でも余り行われぬ」

以上の中ボルネオに於ける例については L. Loth 著 *Natives, Trives of Sarawak*. I 406. *Hose and Mcdogall, Pagan tribe of Borneo*. によつてゐることを註記して、ホースはこれをフィリッピン又はインドシナから伝習したと見なしていると附加されている。

フィリッピンでは現在でもこの方法が見られるようである。今次大戦中、フィリッピンに従軍した民俗研究者犀川礎吉氏はレイテ島で水牛を四頭つないで農夫一人でこれを追いまわしているのを実見したと語られた。たちまちにして田の草は踏みこまれて適当な状態になつたという。

筆者は種子島及び口永良部島に於いてこの方法が比較的近年迄行われたことを聞いた。犀川氏によると種子島では明治35、6年須迄牧の馬をもつて行つていたという。牡の種子馬をリーダーにして未成熟の子馬をあとにつけて入れたもののようなものである。種子島ではこの馬を入れることをホイトゥとよんでいるが、それはこの馬を追う時のかけ声からきているとのことである。三友国五郎教授によると大隅半島でも大正頃迄行われていたという。又全教授によるとこの技術はトカラ諸島の宝島にも見られ、フンヅケニヤシとよばれていたという。宝島では馬でな

く牛を用いていたという。そして古老はこの方法は沖縄から伝えられたと語つたとのことである。

昨夏大島で調査した所によると、大島ではフミツブシとよんでいた。最近迄馬を使用してフミツブシを行つていたらしい。小学校附属の水田で馬の便のない時に生徒たちに踏ませたという話もきいた。

沖縄の古い事情については15世紀末のことを述べたが、近年のことは宮城真治氏が書いておられる。氏によると「昔は水田の耕耘は踏みたぐつたものであつた」という。氏は国頭の北部では近年に至る迄鋤や馬を用いず牛を追い廻して田を踏ませていたものだともその近著「古代沖縄の姿」の中に記載している。

毎日新聞の学芸課長宮良高夫氏は氏の父君高伴氏(73才)の作られた「八重山島の田踏み」なるノートを筆者に示された。以下はその全文である。

『一反歩位の田なら二、三頭の耕牛で二番目の牛の鼻綱を一番目の牛の首にくくり、三番目の牛の鼻綱を二番目の牛の首にくくり、一番目の牛の鼻綱を農夫の左手に持ち、右は三尺位の鞭を振つて操従し草を踏みこむ。牧場附近の田圃は牧場の牛を必要量だけ出して、三段歩位の田なら百頭位を入れて、田の畔の周囲には一間々隔に農夫が手に鞭を持つて牛が田圃外に出ぬ様見守つて、踏ます。一時間位で青々繁つた田草も微塵もなく整地が出来、踏み終る時分には牛は頭から尾まで身体全体泥だらけで、鼠色で、鼠に化けて見えるので、海辺では海に、川辺では川に追い込んで水浴をさせてから牧場に入れる。牛踏みした後では人間の頭程の石(珊瑚礁の小穴のある石)五、六個を長さ三、四尺、直径二寸位の棒に藤葛でくくりつけて、棒の両端に繩をつけ、牛の鞍に結びつけて「石曳き」をして地均して植附ける。右は明治時代迄の農作で、大正時代に入つてからは耕耘も改良、犁でやり、石曳きも台湾式のクルバシヤを牛につけて地均しをする。牛の田踏みは波照島辺では今も行つているかも知れない』

以上の興味深い記事によると八重山では犁耕は大正期にはいつてから始まつたことが知れるのである。

宮良当壮博士によると与那国では牛を用いず小型の馬を用いて田踏みを行うとのことである。但し与那国ではその作業を「ウマンウマスン(馬に踏す)」とよんでいるとのことである。博士からの直接の御教示によるものである。

上記の種子島のホイトゥに用いる馬は小型馬であつたようであるが、南島の南端と北端に於いて小型馬が用いられ、沖縄本島を中心とする地方から大島、宝島にかけては牛が用いられていることは興味深いことで、小型の地馬が過去に於いて早く行われたことを意味しているように思う。なぜかなら、小型の地馬の九州その他の本土黒潮流域に於ける存在は先史時代に及んでいる如く思われることからしても、南島の小型馬の淵源の古さが想像されるのである。この小型地馬については後に更に詳述するが蒙古種の馬、即ち大陸系の馬でなくて、東南亜細亜系の品種と考えられるので、華北一半島一日本本土という伝来ルートを考えることの困難な家畜である。沖縄本島は少くとも中世末期には華南との貿易の上に重要な存在として、立ちあられてくるが故に本島に移入された牛が本島を中心にして拡がりうる可能性は比較的早くあつたであろう。宮古にもその他にも小型の地馬の見られる所はあるが、より有力な牛が小型の地馬にかわりうる可能性は早くあつたと思われる。

私は種子島や南九州に於ける牧場と馬の歴史は意外に古いものではなからうかと思つている。

水田耕作の原始技術としては家畜に踏ませる以外に人が踏んだ場合もあつたことは前記の大島の例でもわかるが、沖縄に於いても同様であることを多和田真淳氏より聞いた。

扇状地形の末縁の湿地こそ初期の水田であつたであろうが、そのような湿地に於ける水稻作には、家畜のえられない場合に足で踏んだことが想像される。

薩南の民俗研究者小野重朗氏は『日置郡の「バカ踊り」祭なども田植前の田を祭の青年が神田と唯の日の区別なく唯どたどたとふみ廻るのだそうですし、苗代田は例の「ニワトコ」或は「クサニワトコ」（タヅノキ）の葉を撒いてふみこむだけの所もさがせばあるのではないかと思います』と御教示下さつた。

北九州の小倉附近ではノーシロフミ（苗代ふみ）という言葉の残つてゐることを北九州大学の畑中健一氏から御教示を受けた。その後筆者が直方附近で聞いたのであるが、青草や堆肥を苗代に入れるのに足で踏みこむのだとのことであつた。

山口県にもそのような方法がある。山口県大津郡三隅の徳見光三氏によると苗代作りは犁を用いず、青草をきり込み、女子供がふみこんだものであると云う。下関市安岡の稲作行事の研究者原能論氏は吉見附近には五十年位前迄は「どべうち」「どべなげ」或いは「どるなげ」などとよぶ行事があつたと教示された。田植の仕事にかゝつた者全部の他に通りがかりの者も（男女を問はず）苗をとつたあとの苗代で、両方にわかれて苗代の泥をつかんでなげあい、苗代を縦横に踏み、泥々になる行事があつたという。そのあとで踏みくだかれた苗代田にも苗を植えて、その後で「うえみて」の料理を参加者が食べたものであるという。

鹿児島日置郡の「バカ踊り」の神事も、吉見附近の「どべうち」も小倉、直方附近の「ノーシロフミ」も原始的な水田技術の遺残か或いはその反映を意味しているものではなからうか。

家畜使用の場合には人が踏むことの代りに家畜を利用したと考えられるが、このように人及び他の動物の足を用いて耕す方法を私は「足耕」と名づけておく。

宋応星の「天工開物」には「足耘」「手耘」の原始技術があげられているが、私の所謂「足耕」は同様に、或いはより以上の原始的技術であらう。

家畜の利用を単に人が踏むことをきりかえたというだけでない、もつと異なる事情を示す記載が晋の張華撰著の博物志に見出されることを指摘しておきたい。以下は淵鑑類函所引の記載による。

海陵県扶江接海多麋獸十千為群掘食草根其処成泥名麋峻民人隨此略種稻不耕而獲其收百倍。

これは興味深い記事で家畜使用の起原の一例を語つてゐるように思われる。水田耕作に於ける獸類による足耕の方法の発見はこのような自然な発見を積極的に計画的に人間が獸類に用いたことから起きた場合もあつたのでなからうかと思ふものである。晋代海陵県に於いて自然獸によつて出来た泥地の利用が行われていたとするなら、他に中国東南沿海に於いてもこのような利用が古代水稻耕作者によつてなされていたかも知れないのである。

華南の水田耕作に於いては水牛使用による犁耕が行われている。

Wagnerによると、印度水牛の亜種が中国に野生し、黄牛の沼沢地方に適さないために畜化したか、さもなくば印度から輸入したものであらうと推想しているが、³⁴⁾ 山根甚信博士は中国に野生水牛は存在しないから、南方から輸入したことは疑いを容れないとされる。³⁵⁾ そして、その時期を「三国時代には早や広東省海岸地方に印度肩峯牛の飼育旺盛なりし証跡があるから、水牛も亦之と踵を接して両広地方に入りたること推察に難からぬ」として、水牛の華

南伝来の初期を第2世紀初葉頃に推定して大過なからうとされている。然しながら水牛の移入によつて家畜による足耕の技法が行われたか否かは不明である。

江南に於ける火耕水耨の技術については史記平準書，貸殖列伝，鹽鉄論通有篇に最初の記載が見られる。

この方法は色々に解釈されているが，前年伏閑した耕地の雑草を焼き払つて，これに水を注いで灌漑し，稲を播種し，発芽後，稲苗が7，8寸に生長した時，ともに生長した雑草もろともに刈りたおして再び水を注ぐと雑草は枯死して，種苗のみ育成する方法であると考えられている。つまり水稻栽培に於ける休閑直播法であつて，田植農法以前の技術である。この場合の灌漑は主として陂あるいは塘という用水池で行われた。火耕水耨は漢代から南北朝にかけて行われた。唐代になつても嶺南で行われた形跡があるが，この頃から田植農法が漸次これに変わったとされる。³⁶⁾

火耕水耨の技術は家畜に踏ませる技術と趣を異にしている。中国東南沿海地方に家畜に踏ませる南海島嶼式技術が行われたか否かは不明である。淵鑑類函引用の博物誌の記載によつて僅かにその可能性を指摘しうるに過ぎない。

そこで南島に於ける技術の由来について考えなくてはならないが，南島の先史時代になんらかの南方系農耕文化の北上があるのでないかと考えている。³⁷⁾ 家畜に踏ませる技術の如きも南海諸島系の技術と考えることが最も自然ではないかと思つている。とするなら，南島には南方系の家畜がきていてよいはずに思われるのである。山羊にはフィリッピン系の小型三毛山羊が混存し，鶏にはマレイ系のやゝ野鶏に近い体形を示すものが飼育されているが他の家畜に於いては，殊に農耕用家畜に於いては実証があげられるであらうか。

九州から南島にかけての古来の牛の系統について知りたいが，不詳である。然し馬については小型の地馬が南島に見られることについて既にふれておいた。林田重幸助教授によると，この小型馬（宮古では宮古馬，トカラではトカラ馬とよばれている）は体高114.5cm，体重は180kg内外のもので，この大きさのものは北鮮以北になく，済州島，琉球，宮古島，海南島及四川等東南亜細亜諸地域の馬は大きさの点で南島の小型馬と殆んど等しいとされる。林田氏は内地型及島型在来馬，蒙古馬及済州島馬の四肢骨と先史時代馬である鹿児島県出水，長崎県田結及老岐カラカミ，愛知県熱田，平井及瓜郷，長野県平出，神奈川県鴨居，東京都田端及千葉県余山遺跡出土の馬の四肢骨を比較して1954年1月17日，日本人類学会，日本民族学協会の連合大会に於いて，その所見を述べられた。次のように要約される。

(1) 出水（縄紋後期），田結（第一指骨）（彌生），瓜郷（彌生），平出（土師），余山（縄紋後期）の馬は小形にして，現在のトカラ馬と殆んど同大，熱田（彌生），平井（縄紋晚期土師器も伴う），鴨居（彌生），田端（彌生）の馬は中型にして，木曾馬，御崎馬，北海道和種及蒙古馬と殆んど同大，朝鮮美林里遺跡の馬もこれに類する。老岐及田結（距骨）の馬は兩者の中間にある。長谷部博士は石器時代馬について出水，田結を小形，平井，鴨居を中形とせられたが，この小型と島型，中型と内地型が殆んど同大である。

(2) 縄紋文化期から彌生文化期を通じてトカラ馬及びアジア東南諸地域馬と大きさ等しい矮小馬が九州は勿論関東に迄及び彌生式文化期に入ると現在の狭義の蒙古馬と大きさを等しくする中型馬が存する。

(3) 観察した四肢骨は人工的に破碎された跡なく，一頭分完全に出土する例もあり，又齒

の磨滅面から老齢も甚だしい。よつて家畜として大切に使役せられたものと思われる。

以上は極めて興味深い発表であるが、以上の中、余山は攪乱の進んだ遺跡であるといわれる。又出水も馬の資料を包含していた層の一部は攪乱の疑いのあることは全遺跡発掘を指導された山内清男氏や河口貞徳氏も語っていたので、問題がないわけではないが、縄紋後期には抜歯が習俗的に見られていることからして、抜歯を南方系習俗と見てよいとするなら、南方系小型馬の北上の可能性が縄紋後期にないわけではないと思われる。

然し南方系小型馬が島嶼型の水田耕作との関連に於いて北移したのかどうかは不明である。せめて南島の生産事情について、すでにふれたものに若干附加しておきたい。

南島にあつては酷薄の表土をもつ珊瑚礁上の島は鉄器時代にはいつても水田開発が急に容易になつたとは考えられない。従つてそれらの島に水田が見られても、比較的近世の開発にかゝるものが多いようである。それにもかゝらず、一部の島には水田作が早く存在していた。朝鮮済州島人が15世紀末、閩伊是麼（与那国）に漂着して後、北帰するに当つて経由した島々について見ると、閩伊是麼の記事には稲、粟が登場する。但し粟はこの島の記載の場合では、穀物一般を指しているともとれることは前文に註記しておいた。記事によると稲は豊富であつたようである。そして二期作である。

所乃是麼（西表島）は粟と稲を用いるが、稲は粟の三分の二もあり、稲作は盛行していたようである。

捕月老麻伊是麼（波照間島）には黍、粟、稗麦はあるが水田稲米がない。

捕刺伊是麼（新城島）には黍、粟、稗黍があつて稲がない。稲米は所乃島にいつて買つて来る。

歙伊是麼（黒島）には黍粟、麦はあるが稲はない。

他羅馬是麼（多良間島）には黍、粟、稗麦があつて稲がない。

伊羅夫是麼（伊良部島）には黍、粟、稗麦、稲があるが、稲は稗麦の十分の一しかない。

覓高島（宮古島）には稲、黍、粟、稗麦がある。

以上八つの島を經由して琉球国に至ると、こゝでは水田と陸田と相半していたとあり、続いて陸田の方がやゝ多い位だと追記されている。水陸作ともに熱帯型の二期作であつた。

以上によつてもわかるように稲作が行われた所は大体に於いて水稻適地であり、従つて稲作を行う島は少い。宮古島の如きは水利に不便な島であるから陸稲作と見てよいであろう。又以上によつて考えられることは、与那国、西表島が稲作の中心地帯と考えられる。従つて「稲は最初その原産地に近い与那国に輸入されて、漸次南島に伝播したような気がしてならない」とする伊波普猷氏の所説に同感せざるを得ない。^{*88}

陸稲作に対して水稻作は概して未開民族の間に稀だとされるが、水田耕作は必ずしも高度の技術を要するとは限らない。自然の湿地、沼地、増水期に浸水する河辺の低地、雨季に際して雨水を堪える田等は水分を余計に必要とする稲を植えつけるに適している。

日本語の沢（sawa）はマレイ語の田を意味する sawah に関係をもつものではなからうか。この sawah が沖縄の水田の tah 日本内地の水田の ta に関連をもつことはほぼ推定してよいのではなからうか。

然も牛や小型馬による足耕が近年迄行われていたので、彌生系の技術とは異なる南方系の技術が北上しているという事実は認めざるを得ない。そしてこの事実と南方系品種の分布が関係をもつたであろうことも否定することは出来ないように思う。

sawañ と tah の関係をあげたが、勿論 tah には水稻が作られたとは限らない。里芋の中の水質を特に好むものが作られたことも考える必要がある。

水田に作る里芋は沖縄ではタームとよんでいるが、水稻を作るに至つてターム作が縮小されるか、中絶されたものもあるようである。

徳之島では水田の片隅に今でも里芋を作っている所がある。

民俗学研究所の酒井卯作氏によると長崎県の西彼杵郡瀬川村では全村祝祭用に使用するために水田の一部に里芋を作っているという。

農林省水産講習所漁業科の戸上重治君の調査によると対馬の峯村佐賀では少くとも一日一回は里芋のみを食している所があるとのことである。

薩隅地方では正月には里芋がなくてはならないものであり、餅とともに里芋を飾ることは注目すべきことであると思う。台湾紅頭嶼のヤミ族では里芋を常食としているが、祝祭にはもとより里芋は欠くべからざるもので、家屋の新築の際にも、新船建造の際にも里芋をもつて新造物の上を覆うのである。

宮城真治氏（前出沖縄本島国頭羽地の民俗研究家）によると、国頭にはンネー (n'-neh) といわれる「芋の祭」があり、山芋と里芋をウガン（拝所）に捧げる行事が過去に於いて行われてきたという。イモ（山芋や里芋）が過去に於いて重要な作物であつたことを語っているように思う。

南方圏では芋類が ubi と総称されているが、沖縄では n'-mu であり、日本古代では芋毛となつている。八丈島ではイモとよんでいる。沖縄の里芋も甘藷に対していう時にはマーム（真芋）とよばれる。即ち里芋こそ真の芋なのである。日本ではイモ系の語以外に屋久島にはタロイモンコとよぶ例がある。多和田真淳氏によると「山薯をさす語は沖縄ではヤムン (yamun) とよばれる」と御教示下さつた。石垣島の川平では山芋を里芋同様ン (n') とよんでいた。又甘藷をアツコン (akkon) とよんでいた。アツコンは赤芋即ち aka-n' からきたものであろう。とするなら、ヤマイモはヤマのン (yama-n') 即ちヤムン (yamun) となつていつたものであろう。こう考えてくると、芋類は総称的にはン (n') であろう。言葉の転訛の上から見て南方に於いて u-bi と総称されていたものから n' がきていることは疑いえないが、このことは ubi を重要な食料としていた生活者の集団が食料としての芋の食い方とよび方を北方えもたらしたものと考え得られないであろうか。日本々土でイモを食う食習がどの位溯つてあつたとすることが出来るかは不明であるが、瀬戸内の縄紋後晩期遺跡に於いて甌らしいものが発見される⁸⁹⁾ ところから、イモ食と関係あるものでなからうかと考えている。縄紋後期に穀食が考えられないとするなら、イモ食と関係をもつたものではなからうかと考えてみる必要もあろうと思つている。タロ系の芋の食し方について見るに、南方の原住民に於いてはタロ芋をゆがいて食するものと、むして食するものがある。

陸生の里芋を作るには簡単な陸耕用石器で可能である。ターム（田芋）の栽培にしても、水稻より簡単で、アミ族の場合について思うと婦人が耕棒を用い水田に作っている。

イモの食習を考えることは本稿の目的とする所ではないが、島型稲作の北上がある位なら他に有力な南方系食料栽培がはいつていないはずはないと考えられるから、その事情をいくらかでも明らかにしておきたいと思つた。

イモを問題にしたと同様の立場から、陸耕作物を考えておきたい。

西南日本に於ける陸耕がいつ頃から始まるかは問題であるが、縄紋後晩期は注目すべき時期

と考えられる。

縄紋後期に属する屋久島一湊からは大隅半島の彌生式遺跡に出土すると同様の有肩及び靴型類似の罫器と考えられる扁平大型の粗造石器が出土する。薩摩谷山町草野貝塚からは八重山諸島の罫器と考えられる筥型石器に酷似する粗造石器が出土している。同様の石器は沖縄本島の縄紋系石器の中にも見出される。

八重山諸島の先史土器は縄紋式と無関係のものであるのみならず、彌生式土器とも無関係のものである。

この八重山式の横耳形把手をもつ先史土器が、大島本島の宇宿系の縄紋土器と共存して徳之島に発見されたことは、一連の八重山式筥型石器の分布と相まつて、何らかの南方系農耕文化の北上を語っているかに思われるのである。

罫耕の可能性は南域に限られているわけではない。熊本地方の御領遺跡からも扁平大型の粗造石斧が出土することから原始農耕の存在について、小林久雄氏や三森定男氏が早く注意されている。

馬関地方から瀬戸内にかけても扁平大型の粗造石斧が縄紋後晩期遺跡から屢々出土する。興味深い例は周防の岩田遺跡で3例の甑らしいものをまじえて粗造大型扁平の石鋏と見られる石器が縄紋後期層から出土するという。³⁹⁾

罫耕作物としては粟作は古いものであらうと思うが実証をあげることが出来ない。その呼称は小倉進平博士の「朝鮮語方言の研究」によつて見ても半島には結びつかない。然しながら、南方に行われる *djawa* (スマトラ島パレンバン人), *djawaut* (瓜哇人), *daua* (パティ・ピサヤ族) 系の語は台湾のインドネシア系語群の中にも類縁が見出されるが、日本のアワ (*awa*) とともに明かに類縁関係を示すように思われる。

筆者はこの想定をすでに他でも書いたことがあるが、その後、1940年に藤田安二氏が同様の想定を「古事記植物考」⁴⁰⁾ に於いて発表されていることを知つた。藤田氏は全上論考に於いて古語に出てくるアヂマサのアヂは印度系のある古語中の檳榔を示す語そのままの伝来であると考え、又マサは南方系語で果を示す語であること、樟 (クス) は台湾原住民族の呼称 *rakus*, *dakus* と関係があり、マレイ語の匂う意 *raksi* より出た言葉であること等をあげておられる。

動植物名その他生活に関係深い物質名詞にわたつて黒潮水域の島々の採集をするなら、更に興味ぶかい資料がふえるであろう。

かくて種々の想定の上立つて思う時に、南方系栽培文化の北上していることを否定出来ないように思われる。稲に於ける長型のものが南方系のトボシ系のよび方とともに南島から西南日本にわたつて残存することもまた偶然のことではないように思われる。

尙、南島に於ける穂づみの用具のもつ意義について述べておきたい。

石庖丁が種子島には極めて稀に発見されるが、より南には全く発見されないことは少くとも石庖丁が行われた時代には江南系の稲も内地系の稲もはいつていないことを意味している。然るに沖縄に於ける穂づみの用具は、波照間で見たイララ (*irara*) は原理的にはフィリッピンや海南島、ジャワ等に見られる穂づみ具に近いものであつた。又国頭奥区でみたシーグ (*shihg*) は台湾山地原住民族の使用している鉄製小刀に酷似するものである。

沖縄諸島では南方式の高倉、臼、堅杵が現在でも盛行しているが、南方系農耕文化の北上があるとすれば、これらが内地系稲作に随伴して、北方から南下したとのみ考える必要はなく、

むしろ南方系農耕文化の一部としてある時期に南方系粟、稻等に伴い北上広布したと考えることも出来るわけであろう。

農耕文化を運んだものは農耕文化を身につけた生活者の集団であろうと考えている。とするならあの水域を島から島へと移動せしめた如何なる事情があつたものであろうか。

南島に於いては島から島への距離が比較的近距离にして移動し易かつたとしても、八重山と宮古島との如き、北方では七島灘の如き、距離に於いて、或は波浪のけわしさに於いて困難な水域がある。このような水域を越えての移動には余程海に慣れていることが必要である。又海に慣れていたとしても、如何にして新しい島へ島へと家畜までたづさえての移動をやつてのけるようなことになつたものか、この疑問に答えるためには、どのような生産生活が支配していたかを考えるより他に方法はないと思う。現在南方黒潮水域に於ける原住民族は純粹の農耕者でもなく、純粹の漁撈者でもないという場合が屢々見られる。即ち半農半漁の生活形態をもつているものが多いのである。

もつとも農と漁とが女性と男性とによつて性別に分担されている場合が原始的である。一例をあげれば台湾紅頭嶼に於いてはタロ芋作りは女性の日常のもつとも主要な仕事であり、漁撈は男子のもつとも主要な仕事となつている如きである。

恐らく黒潮のコースを北上した者も農耕文化の主要な荷担者は女性であつたろう。そして漁撈と狩猟は男子の担当であつたであろう。

然しながら早期に於いては漁撈を主体とし、農耕は採集的傾向の強い原始農耕を随伴したものと考へている。

新しい島への移動は新しい生活地域を開発しようとして新漁場を求めることから促されたものであろう。

然して暖海の原始魚撈として最も広く見られるのは潜水して銚で魚を捕える方法であるが、それに次ぐ原始的魚撈としては網を海底に張り、魚を追いこんで捕える方法である。琉球の糸満の漁人についていえば海底にあつて網の両下端をおさえるのも、魚を追いこむのもすべて漁人が潜水して行ふのである。

このような潜水漁撈の行われうる条件としては海水の温度の高いこと、海水の透明度の高いこと、魚のあつまるに適當な岩礁性浅海をもつこと等が条件として考えられる。このような浅海の漁撈はソネ (sone) 或いはゾネ (zone) とよばれていてフィリッピン島のルソン島からバタン諸島を経て台湾の東海岸を経て八重山に及び更に琉球列島に沿ひ日本近海に及んでいるが、フィリッピン、台湾近海、海図や宮崎県遠洋漁業指導所で作成した台湾から琉球薩南諸島沿海の漁場図によつても、又沖縄群島宮古の水産高校から農林省水産講習所にきている下地、糸満の二君の南島に於ける実習経験による報告をもとにしても、台湾東海岸は深くて、紅頭嶼、火烧島附近を除くと蘇澳附近のソネがやゝ著しい。蘇澳ゾネといわれるソネから北東には直ちに与那国島、波照間島、西表島近海にむらがるソネ群に連接し、最も距離がある宮古島と沖縄本島間に於いてさえ連続したソネによつてつながれているという事情はまことに興味深いものがあるといえよう。

前記の糸満漁人の潜水漁撈によると、ソネの魚をとりつくして一時的に漁場を荒廃せしめることは容易であると宮古出身の下地君が語つているが、ソネからソネへと新漁場をもとめての移動のためには新開の根拠地を必要としたであろう。そして新居住地での生活が地につくためには女性を必要としたであろう。殊に何らかの農耕生活が考えらる限りは女性が農耕をもつて

随伴したことが推定されるのである。

ソネ漁撈に重点がおかれた南方原始漁撈者にとっては適当なソネの乏しい台湾本島には魅力が少かつたであろうと見てよいであろうから、南方系漁人の北上が考えられるとするなら、直ちに優秀な八重山のソネ群に移行してゆくことが自然であつたであろうとすることをこの際注意しておきたい。

魏志倭人伝の未盧国の条に「沈没して魚蛤」或いは「魚鰻」を捕える倭水人が皆黥面文身していたとする記事は興味深い記事である。

入墨が現在尙南島人の中にあることから考えても黥面文身せる当時の倭の水人は南島のソネを追つて北上した南方系漁人の歴史時代初頭に於ける北九州沿岸に於ける活動を物語るものとみられないであろうか。

このような海島の生活に於いて最も重要な生産手段をなすものは船である。1954年に於ける波照間島に見出された断面割竹型を示す重量のある大型片刃石器や、九州本島沿岸地方から種子島にわたつて見出されている厚手の重い大型片刃抉入石斧は木工用のものであろうが、特に造船に関係するもののように思われる。同様の石器は台湾紅頭嶼に於いても発見されているが、ヤミ族はその石器からの移行形式と見てよいウマ (uma) とよばれる鉄器を用いて船材を削つている。

八幡一郎氏の所謂乳棒状石斧の中、刃部の蛤刃をなすものは割断用のものと思われ、やはり造船用にも使用されたものであろう。

従つて、それらの石器の分布は海上生活者の活動展開の証跡として注目する必要があると思われる。⁴¹⁾

(七)

以上に於いて南島に於ける原始的生産事情について考察してきたが、こゝでは稲米に関する言葉について、従来行われてきた研究成果の上に立つて考えて見るとともに、島型稲作をも含む南方系農耕文化と関係をもつかとも思われる民俗的な習俗についてもふれておきたい。

稲米に関する言葉について考えるに、南方語に連関を見出すことの方が、朝鮮半島、大陸に連関を見出すことより遙に容易であり、且明瞭にその関係を比定しうるものが多いことは注目に価することのように思う。

トボシ系の言葉が南方語に連関することについては詳述したからこゝでは触れない。

稲米をさす語に *parai*, *béras* 系の語が南方に一般的に行われていることはいう迄もないが、馬淵東一教授によると、尙日本語のコメに連関を有するものが色々と見出される。即ちバタク語の *ome*, *eme*, シライヤ語の *imei*, ビサヤ語の *homay*, サギル語 (ミナハサ北方) の *ëmme* ペンテナン語 (南部ミナハサ) の *mai*, 及びヤップ島語の *lome* がある。又台湾アミ語には飯 (米飯, 粟飯) を指す語に *hèmei*, *hmai* がある。ケルン氏がこの種の語がニュージーランドのマオリ語の *komme* に示されるように本来恐らく食物を指したものであろうということは興味深い。⁴²⁾

松本信広教授はオーストロアジア語系の言葉の中にコメに関係ありと考えられる語を探つておられる。

日本語 *komme* 琉球 *komé*, *kumi*, *fum'i*, Annam : *kom* かしげる米,
Sédang : *hme* かしげる米 Cam : *kaman* 粘稻⁴³⁾

馬淵教授はケルン氏の事例と松本信広氏の事例とを直ちに結びつけることはいさゝか困難であるとしてもオーストロアジア語系の諸族とマラヨ・ポリネシア語系の諸族とは農耕文化の上でも諸種の関連が予想されるから、かゝる語彙の近似は一応留意されて然るべきであろうと述べられている。

イネという語に於いても、松本信広博士は安南、ジャム、カムボジア等の印度支那諸族の語に ni 或は ne 系の音をもつ語を探つておられる。

然しもつと直接的に我がイネに近縁を示すものが齊藤正雄氏によつてインドネシア語群の中に指摘されている。⁴⁴⁾

ino	北部	ハルマヘラ・ガレラー
wine		セレベス島ブギイ
wene		セレベス北東トンテムボアン
bini	全	トリトリ
pine		ハルマヘラ北部トペロー
pinye	全	南部マバ
bani		ボルネオ・ダイヤク
banih		スマトラ中部

籾種に当るインドネシア語

inii (ii)	中部	セレベス・トラジャ
inih	北部	スマトラ・ガヨー
bine		バリイ・ロムボック
běni	南東	ボルネオ・ブサン

琉球語の「籾」及「赤飯」

イニ	イイ	イ	は鼻音(喜界島方言)
フスメ	ミオバニ		(熏美御飯) 赤飯の事
	ミオバニ		(美御飯) 赤飯

齊藤氏は以上の記載について、次のようにいわれる。「右語群の系列を見れば転呼の順位が自然諒解される筈である。我が上代には恐らくヅ、ヰ(ヱイ)、ヴ、ヅ、ヅオの古音が存在していたと考えられる。依つてイネとヱイネ(ヰネ)は容易に転じ得る。pi は hi の古音であつて、pi, hi, si は通音であるから、ピネがヒネ或はシネ(和籾, 荒籾)に転ずることは可能である。喜界島方言イニ、イイとトラジャ族バレー語のイニイ、イイの相似は争うべくもなく、又琉球古語フスメ(熏)ミ(美称)オ(美称御)バニ(飯)のバニがスマトラ中部馬來語バニ及びダイヤク語バニと同源であろうことも否定し得ない。尙スマトラ西海岸パダンでは「籾苗」をバニエー(baniéh)に作つている。同時にバレー語の「苗」ナイ(na'i)も国語と同源であろう」と極めて興味深い考察を示されている。尙齊藤氏は前記馬淵教授のあげたスマトラ・バタク語の eme 系の語に注意され、スマトラのシメルンゲンの ome, タラウド諸島の ame, サンギイ諸島の eme をあげ、これらが、おそらく最初「籾」を意味したであろうが、後世品種の複雑化と共に梗籾の紛混を生じて一様に籾の中に数えられたであろうとしている。そしてエメ、オメ、アメが我が古語の飴と同源であつて上古に於いて籾を意味していたと考えられている。又飴をタガネと訓むことについても、沿岸バレー語に於いて taka が「籾, 粘着, 乳房に抱かる」等の語義を有することゝ同根同源に出ると見ておられる。

国語のウルチ、ウルシネが印度の古語の稻をいみする *vrihi* からの転訛であることについては屢々注意されてきている所であるが、その転訛がいかなる語群を経てきているか重視されなくてはならないであろう。新村出博士は「アミス語にて米をブラツ、ブラチ等というのは台湾蕃語の通称で、その語源は更に南方馬來語を経て遙かに西方に発する」ことを指摘され、国語のウルチ、ウルシヌが共に以上の如き南洋語から入つたものであろうかと早く注意されている。⁴⁵⁾

齊藤氏は稻の意にジャワ語の *pare*、スムバ語の *pavi*、馬來語の *padi*、ミナンカバウ語の *pai* があり、更に糯の意に於いてセラム語の *puluti*、セレベス・ミナハサ地方のトンセア語の *pult*、チモール島の *pulu*、炒り飯の意に於けるスマトラ・アチエ州ガヨー語の *bértih* があることをあげている。

粃がらはマレイ語では *sukam* であるが、沖縄では *sukub* である、⁴⁶⁾ 粃がらを *sukumo* とよんでいる例は茨城県北相馬郡、千葉、神奈川、静岡、山梨、三重、京都、兵庫、岡山、鳥取、山口、愛媛等かなり広く見られる。⁴⁷⁾

白は沖縄に近いヤミ語では *oson* である。このように稻米、あるいは稻米とかゝわりのある語にインドネシア系の言葉に近似の傾斜を示すものの多いことは偶然のことゝは考えられないのではなからうか。とするならば、島型稲作の北上を考えずしては説明がつかないのではなからうか。

南方系農耕文化を考える立場からは、尙農耕の儀礼や習俗について考えてみる必要があるわけである。この点について柳田国男先生は啓示に富んだ発言をしておられる。

「現在日本に見られる農耕儀礼の大半が水稻栽培に集中し、しかもその多くは類似の儀礼を近隣の諸民族特に東南アジアのそれと共にしている。こうした文化的一致が全く独立に発生したとは考え難く、殊に穀霊が収穫から播種までの期間に新生するという信仰が同じ米についてマライシヤと日本とに別々に行われたとは想像し難いのである」と。⁴⁸⁾ 柳田先生は尙、琉球列島には二つの「古見」という稻の栽培と関係深い地名が見出されることを指摘され、更にその土地の共通の特色、同様の地名の分布を注意しておられる。

穀霊に関する信仰には興味深いものがある。新生の信仰ではないが、南方には穀霊との関係に於いて歯牙変工を行つている例が見られる。宇野円空博士の「マライシヤに於ける稻米儀礼」には *Juundoll* の *Relligjon der Naturvölker* からの引用として、スマトラのカロバタツク人に於いては「その齒を欠いだり染めたりする風習も、飯を食ふ時に稻魂である *Si Dajang* を驚かさぬ用心だといはれる」という興味深い記事を載せている。染齒にしても無意味に発生するはずはないが、抜齒に至つては容易ならぬ身体的苦痛を伴うものであるから、余程重大な意味がなくなつては発生するはずはなかつたと思うものである。抜齒の習俗はその習俗の伝習者自体が多くは既にその本来の意義を忘失しているために、抜齒習俗をもつ未開民族をしらべてみても、今ではその意義の明瞭でない場合が多い。かゝる中であつて、上述のカロバタツク人に於ける例は興味深いと思う。

日本に於いては抜齒が習俗的に行われたというのは縄紋後期、特に晩期からで、引続き彌生式期にも行われている。然して南方系農耕文化が縄紋式後期には、はいつているとするなら、我が先史時代の抜齒習俗は一般的にはいられないが、局部的には南方系農耕文化との関連に於いて考えられるものもあるかも知れないと思うに至つた。

魏志倭人伝に於ける倭人の風俗は「有無する所僮耳朱崖と同じ」とするのであるから、南方

的色彩の強いものであつたと思われる。

その中であつて「黥面文身」の風俗は先史人骨の上に見られる抜歯の例と相まつて、南方系習俗とするのが最も自然であると思うものである。

沖縄に於ける入墨習俗の残存は三宅宗悦博士の徳之島遺跡人に於ける抜歯例の発見と相まつて、これらの習俗の南方経路移入を物語るといえないであろうか。

前記朝鮮済州島民の15世紀末に於ける漂流見聞記の中に所乃是麼（西表島の組納）の婦人が鼻の両旁を穿つて小黒木を貫き、その状鬢の如しという記載がある。これについて伊波普猷氏は「尙真王の領土内に、ボルネオあたりの蕃人と同じ風習の人民がゐたといつたら早速異議を挟む人があるかも知れぬが、南島の婦人の入墨がインドネシアのそれと同系統のものであるということを知つたら、思半ばに過ぎるものがあるろう」といわれている。⁴⁹⁾

1954年4月の波照間島調査中全島前村の親盛家で神聖な宝器として伝えられている木製鼓胴を見たが、長形中空の懸垂式の鼓で南方系のものであつた。その表面に刻まれた文様は興味深いものがあつた。胴をとりまいてつけられたものである。実線或いは点線の間を、山形の連続紋の組合せで、菱形つなぎを構図したものである。このモチーフは台湾のケタガラン族やパイワン族の彫刻にも見出されるものである。この鼓胴面の文様が琉球の先史土器のそれに近似している。琉球先史土器の紋様は日本の縄紋土器の紋様に比して特色をもっている。日本の縄紋土器の中に強いて近似のものを求めるなら、西南九州から種子島にかけて見出される曾畑式の紋様をあげてよいであろう。然してこの鼓の示すような紋様文化をもつた民族が列島の北部で日本の縄紋文化に接して、萩堂式で代表される琉球の縄紋土器文化を生み出したものではなからうかという考えに導かれた。勿論 tentative なものに過ぎないが。

ハサミ織とカスリが沖縄の織物文化として著名であるが、フィリッピン以南のインドネシアや海南島で盛んに作られていること、思い合わせて見る必要があることも金関丈夫博士が注目された所である。⁵⁰⁾

台湾高砂族の音楽と八重山のそれとが酷似しているということも、高砂族の舞踊と沖縄のクイチャーが酷似しているとされること、⁵¹⁾ も民族学の問題として十分に考えて見る必要があるように思うものである。

八重山には南方のマヤの国からやつてくる神を敬待する行事があるが、台湾の高砂族の中にも同様にマヤとよぶ神があつて、マヤの国からくる神を敬待する行事をもつものがあることは、伊波普猷氏が注目されているが、⁵²⁾ 柳田国男先生も折口信夫博士との対談で、そのことに言及されている。⁵³⁾

文化をはこんだものは人間であることを思うと、体質が問題になる。南島から西南九州にかけて類似の体質が見られることは、先史文化のあり方と対比して興味深いことである。金関博士はルソン島北岸にはバイヤー教授がかつて「アイヌ」要素として記載した毛深い人種のことを念頭におく必要があるものと考えられている。⁵⁴⁾

このように沖縄に濃い南方色というものは偶然のものとは考えられないと思うのである。

島型稲作またこのような一連の南方系要素との関連に於いて考えねばならないことを思うことから、沖縄に於ける南方系要素に注目したのである。

日本々土の内地型稲作は一期作であるが、南方の島型稲作は二期作である。

折口信夫博士は祖先の一部が曾つて住みつき、或は經由して来た土地での農業暦に注目された。それは南方島型の二期作に関して、我が国の「二度正月」の意味を考えられた極めて重

要な発言であつた。博士は次のようにいわれている。

『我々の祖先の有力な一部分は、南島から幾度となく渡つて来た事は疑いが無い。此種族が、わが中心民族の祖先と謂はないまでも一此に対しては、私は肯説定を持つている。後に述べるであろう。一其等の南方種は、二度の秋の刈り上げをした。自然、種おろし・栽えつけには、暖いと暑いとの二度の春を持つていた。十一月の新嘗祭がありながら六月の神今食の行はれた理由は、まだ先達にも、仮説たり得るものすらない。私は、此をかう考える。

陰陽道に習合せられて残つて、其が江戸期まで行はれたものと見られる「二度正月」の心理であろう。同時に、徳政や古代の商変しなど云う変態な社会政策の生み出される根柢になつたものと思はれる。大祓への如きも単に上元・中元に先だつ季節祓へでなく、やはり一年を二年と見た伝習から出たものと見る方がよい様だ。一年に一度刈り上げる国土に来て、固定した信仰行事の上では二秋の旧郷土の俵を残したものらしい。』⁵⁵⁾

この重要な見解は昭和四年一月「民族」第四巻第二号に発表された「まれびとの意義」なる論文にかゝげられたものである。それ以来この啓示が我が国古代稲作の系統を考えようとするものに於いてさえ注意されずに今日に及んでいるように思われる。

然しながら和歌森太郎博士は折口博士の所説とは別に、各地の民俗行事の考察の上に立つて「六月正月」が正月行事に他ならないことを指摘された。⁵⁶⁾これに関連して、金関丈夫博士は「それは六月に収穫祭をした風習の名ごり（イフガオなどはこれですが）で、年二度の収穫を常とした民族の北上したゝめに痕跡的になつた正月のことだと思ひつきました」と興味深い見解をおよせ下さつた。折口博士の見解とゝも重要な啓示に富むものとして、こゝに引用させていたゞいた。

インドネシアの栽培文化に於いて、粟は古い層をなしていると考えられているようである。日本の農耕文化に於いて、稲と粟と何れがより古い層をなしたかは興味ある問題である。

農耕に於いては水稻作が支配的であることから、農耕儀礼が水稻栽培に集中するに至つたものであろうが、陸耕が未だ有力な栽培形式をなしていた時代には当然陸耕作物に於ける儀礼があつたと見なくてはなるまい。常陸風土記の筑波郡の条に見られる祖神巡幸説話に、古老の語りものとして、昔祖の神の尊が諸神の処を巡幸していた時、駿河の国福慈の岳に到り、日の暮に遇つたので、宿を請うと、福慈の神が答えて「新粟の初嘗して家内諱忌せり。今日の向は冀はくは許しあへじ」と申したという話が見られる。

粟にも古く儀礼が存したことが考えられるのである。波照間島の農耕儀礼は粟作を中心とすると島民が一様に語つた所であつた。全島に於いては15世紀末には未だ稲作を行つていなかった位であるから、粟が古来の作物であり、従つて儀礼は粟中心に行われてきたものであろう。

稲と粟とは南島に於いて何れがより古い栽培植物であつたものか、相ともなつて古くからあつたものか、それらの上限ほどの位溯りうるものであろうか。こうした問題が南島の農耕文化を考える上に尙残されているわけである。

然しながらこれらの問題は日本々土に於いても同様にとりあげられなくてはならない重要な問題である。

琉球には粟国島という島名があるが、日本々土にも粟島は古文献の上に屢々登場するし、現に粟島、淡路、安房等の形で島名、地名に名残をとゞめている。

地域的には南島に於けると同様、稲よりも粟を主体とした地域が西南九州には近年迄存在していた。

薩南の民俗研究者小野重朗氏の御教示によるものであるが、揖宿郡喜入村弓指部落では地神の祭にはついた粟を供え、田の神には米のシトギを供えるきまりだとされている。指宿地方は全般的に見て、地神は田の神より古く原初的な神と思われることからしても、粟の供物が古い形であると少なくともこの地方では考えられることは興味深いことである。

(八)

以上不十分ながら我が古代稲作の系統、その故郷、伝来経路等についての究明を試みてみた。然し、従来とかく軽視されがちであつた南方との関係に重点をおいたので、南島に於ける農耕事情にやゝ立ち入ることになつた。

我が古代稲作史に関する研究としては従来も重要な成果が出ている。浜田秀男博士の「イネの由来並に分布について」⁵⁷⁾は我が国稲作史研究を前進せしめたと考えられる劃期的な労作であつた。考古学、言語学、史学、地理学、栽培学、植物学各方面に渉る検討考察を行つたものであつた。焼米、粃痕についての測定値をあげ、樋口教授の大和国及三河出土粃痕の測定値にも注目されている。又日本稲の名称は一は朝鮮半島と関連をもち、他は南支及南洋諸島とも縁故があることは否めないとされ、経路については北支の稲より、朝鮮稲が由来して居り、引いては我が国水陸稲の大部分が発達したと結論されている。

その後、近年出版された安藤広太郎博士の「日本古代稲作史雑考」は論証の厳密な、極めて重要な労作であつた。浜田秀男博士の研究をはじめとする従来の研究業績を概観検討し、稲実の性質の比較研究の上から、我が国稲作の故郷を江南地方と見、対馬海流によつて我が北九州或いは南朝鮮に來たとしている。新しいものとしては「新嘗の研究」第一輯にのせられた「日本に於ける水稻耕作の起源とその社会的影響について」(田名網宏氏)がある。

従来の研究業績を概観するにも便である。「新嘗の研究」には安藤広太郎博士の「稲の伝統について」なる論文が載つている。大体博士の前著を圧縮したものと見てよからう。

その他では福島要一氏が岩波新書に「米」を書かれているが、その中にも我が国古代稲の系統についてふれられた一節がある。

尙最近出た農林省稲作史研究会の「古代出土米」の研究は重要な研究である。

筆者は従来の研究については安藤広太郎博士や田名網宏氏による詳細な研究文献のサーヴェーがなされているので、再びその労をくりかえさなかつた。たゞ必要に応じて従来の研究に言及するに止めた。

筆者は内地型稲作の故郷としては安藤広太郎博士ら農学者による江南説を重視するが、伝来経路としては東南沿海地方—黄海沿岸、殊に口東半島沿岸の調査は重要であると思つている—から西南鮮に及び、南下して北九州に及んだものであろうとした。

品種については赤米の史的考察、赤米の地理的分布、方言名、粃痕の実測、遺跡の状況を通して、南方種もあつたと考え、又水稻のみでなく、陸稲があつたのではないかと考えた。

又南島には先史時代以来耨耕が行われたと考えられるが、水田耕作に於いては、先史時代の状況は不明であるが、家畜に踏ませる原始的な耕作法があり、薩南諸島から大隅半島に及び、年代的にも極めて近代に至つていたことを明らかにした。こうした特殊な技術を伴つた南方系稲作を「島型稲作」として「内地型稲作」に対比して考える必要のあることを考えた。又我が本土の先史時代に出現する南方系小型馬は或いは島型の農耕に関係をもつたものでないかと注意した。

尙南島には重要な栽培植物として、里芋、粟、麦等があるが、少くとも里芋、粟は南方語の中に明確に結びつくようであるから、この食習が黒潮水域に於いて関連をもつて拮がっていると考えられ、島型稲作をも含めて、一連の南方系農耕文化の存在を推定せしめるものがあるとした。

稲作に於ける南方との連関は稲米の方言の上からも、農耕儀礼の上からも南方との連絡は考えられることを指摘した。

以上あげたように色々の面にふれたが、筆者がこの論考に於いて最も関心を示したのは「島型稲作」と筆者が規定した南海諸島型の稲作である。然しこの型の栽培文化は他の島型の農耕との関連に於いて更に詳細な調査が必要であることは云うまでもない。

南島の調査に於いては、与那国、西表島、久米島等の重要な島々の調査がなされていないので、今後それらの島々を精査する機会をもちたいと夢見るわけである。

この研究には歴史上の問題を探る上で、文献について金関丈夫博士から多大の御教示をいただいた。その上論考の閲読をお願い申上げた。又、酒井卯作氏を通して論考を柳田国男先生に見ていたとき、御助言をいただいた。又農林省稲作史研究会の佐藤敏也氏にも御教示を乞うた。

九州農事試験所指宿試験場々長藤瀬一馬技官、知識敬道技官、山川試験場々長秦信親技官ら農学者の方から農学的立場からする御教示をいただいた。又九大農学部永松土己教授からは文献の貸与をいただいた。

考古学的資料については鹿児島県考古学会の寺師見国先生、河口貞徳氏、盛園尙孝氏、北園博氏、河野治雄氏らから資料の貸与にあづかつたり、御教示を受けたりした。

かゝる多くの先学の方々の御協助を受けながら、研究をこの程度のものにしか進めえなかつたことをはづかしいと考えている。

追 記

本論考の校正を待つている間に九学会の奄美大島調査に参加、7月以来約1ヶ月、筆者は考古学班のメンバーとして、河口貞徳氏、曾野寿彦氏、野口義磨氏と共に大島本島宇宿貝塚の発掘に従事した。この調査及び、その間に於いて得た新しい知見について追記を行つておきたい。

(1) 彌生式土器発見の南限は大島本島に及ぶことが明らかにされた。

筆者は本文中、彌生式土器発見の南限はトカラ諸島中の臥蛇島であるとしたが、今夏の大島調査によつて、彌生式後期に属する薩摩式の脚台を有する土器々底部が大島本島笠利村宇宿地方に於いて発見されている事を知つた。宇宿小学校々地内に於いて全上土器の包含地も確認することが出来た。宇宿小学校々地遺跡に於いては祝部式土器片も混在していたが、攪乱層であつたために、層位関係を明確にすることは出来なかつた。

祝部式土器が南島に広く及んでいることについては本文中に報告してあるが、我々の発掘した宇宿貝塚の先史系土器の残存を示す包含層上層に於いても確認された。

薩南、大隅半島に於いては彌生式(後期)土器が祝部式土器と共存することが一般的であることから考えるなら、古墳期に於いて、彌生系の土器が祝部式土器に共伴して進出したという事情があつたかも知れないのである。この推定の適否は何れ近い将来に於いて確めうらと思う。

(2) 水芋を用いる行事

金関丈夫博士は本夏九学会調査の際、沖永良部島に於いて「家近くの水田のかたわらに水芋を作り、正月16日の「はかまつり」(先祖祭)に用いる」という行事を採集されて御教示下さ

つた。

(3) 千葉県余山に於ける小型馬出土状況について

千葉県余山貝塚は攪乱の進んだ遺跡であるとされることについて本文中に註記したが、大島調査に同行された国立博物館先史考古学室の野口義磨技官が余山に於いて小型馬を発掘した発掘者であることを知った。氏によると馬は 120cm の深さから発見されたという。加曾利Bから安行式に移行する時期の層に当たるといふ。復原可能な大型土器が出土したあとに馬が発見されているので、馬発見の部位は攪乱の疑いはないものと考えたと野口氏は語られた。

(4) 印度型靱出土地と先史時代の小型馬及び台湾の山馬

林田重幸氏は日本畜産学会々報26巻別号の1に「先史時代馬に関する2問題」なる論文を掲載されている。その論文中に、「印度型靱出土地と先史時代小型馬」についての興味深い記載が見出される。

「樋口氏は三河土器の靱痕を測定し印度型であるとし、安藤博士は豊橋市瓜郷遺跡出土米は印度型でないかといひ、前記三河及び樋口の南薩の場合と同じく黒潮に乗つた南方人の齎らしたものと推測するといふ。この瓜郷出土馬は先史時代小形馬でトカラ馬と同大と考えられる。盛永博士は米の伝搬経路を示し、瓜郷から平出に伝つたとする。この平出の馬も小形であり、現代のアジア東南諸地域矮小馬と同大と考える」と。

東南亜細亜に於ける小型馬の分布状況に於いて台湾の状況が不明であることを遺憾に思つていたが、林田重幸氏から古文献に見出される山馬の記事について御教示を受けた。

台海伝説録所収の赤嶺筆談に「内山有山馬」なる記事が見えている。西川如見の増補華夷通商考の大宛の条には土産として山馬皮があげられている。

農林省畜産局編著の外埠及滿州国馬事調査書(昭和10年)中、台湾馬事調査第一章領台前の馬産には「漢人移住後 300 年間に平埔蕃の馬は、漢人に馬事思想を欠除せると、当時馬は余り小格にして役畜としての価値少かりし為、衰亡に歸したるものの如く、又平埔蕃以外に馬に附ても、特に顯著なる史実に乏しきより考察して、領台前の馬産に関して見るべきものなかりしは想像に難からず」と見えている。

山馬がインドネシア系原住民族の間にのみあつたらしいこと、それがあまり小型にして役畜としての価値の少いものであつたことは興味深いことである。インドネシア系原住民族が小型馬をもつていたことは、南島にあり、日本々土にもいた小型馬が如何なる経路を経て分布するに至つたかを考える上に興味深い手がかりを提供するものでないかと思う。

日本々土及び南島の先史時代には小型犬が発見されている。同様の小型家犬は台湾先史時代の貝塚からも出土しているし、インドネシア系原住民族の間にも飼育されて来ている。

犬、馬の如き重要な家畜が、然かも相似の体形のものが台湾、南島、日本々土と分布していた事情は注目する必要があると思う。

小型家犬も小型馬も日本々土から南下して、南島、台湾へと分布したとは考え難いであろうから、黒潮水域を北上した人類の集団との関係に於いてその分布を考えざるを得ないと思う。

(5) 鹿児島大学法文学部構内遺跡出土の彌生式土器に見出される靱痕

林田重幸氏が鹿児島大学構内に於いて発見採集された彌生式土器(後期)にはしばしば靱痕が見出されるが、それらの中、圧痕の明瞭なもの3例について、林田氏と共同で実測した。実測数値は次の如くである。

第1例	長さ	0.65cm	幅	0.27cm	長幅の比	2.4 強
第2例	長さ	0.6 cm	幅	0.4 cm	長幅の比	1.5

第3例 長さ 0.5 cm 幅 0.22cm 長幅の比 2.27強

以上3例は何れも小粒であるが、第1例、第3例はやや長型、第2例は短型を示している。

註

- 1) 前川文夫, 植物学からみた「稲」. 人文科学の諸問題. 共同研究「稲」.
- 2) 川崎夏司, 種子島に於ける赤米二種並に畸型穂陸稲. 九州農業 第7号.
- 3) 喜舎場永珣, 沖繩群島石垣島在住の郷土史研究家である.
- 4) 松尾孝嶺, 日本の稲.
- 5) 古島敏雄, 日本農業技術史第一章原始時代の農業. 附注(20).
- 6) 前川文夫, 前掲論文.
- 7) 柴田 実, エフツヒメの信仰について. 日本民俗学 2(3).
- 8) 盛永俊太郎, 世界の米と日本の米. 農業技術 7(12).
- 9) 新村 出, 東方言語史叢考中の「日本人と南洋」 147頁.
- 10) 馬淵東一, 言語上より見たるインドネシアの物質文化. 新亞細亞 5(12).
- 11) 岡 彦一, 稲品種間の各種形質の変異とその組合. 育種学雑誌 3(2).
- 12) 盛永俊太郎, 古代出土米 26頁.
- 13) 齊藤正雄, インドネシアの稲作祭祀. 新亞細亞 5(4).
- 14) 駒井和愛編著, 考古学概説 209頁.
- 15) 小林行雄, 日本考古学概説 163頁.
- 16) 石 璋如, 鋤頭下の蒼洱与中原. 新中華復刊 第四卷 第十六期.
- 17) Tweedie, M. W. F. The Stone Age in Malaya. Journal of the Malayan Branch. Royal Asiatic Society. Volume xxvi Part 2, 1956.
- 18) ボルネオの穂づみ具は Georg Buschan 編の Illustrierte Völkerkunde 中の東南亞細亞に関する研究中に見出される.
- 19) 森本六爾, 日本考古学研究 178頁.
- 20) 金関 恕, 唐山市賈格荘の戦国墓. 史林 38(2).
- 21) 鹿野忠雄, インドネシアに於ける甕棺埋葬. 東南亞細亞民族学先史学研究 I 参照.
- 22) 桶口清之, 日本古代産業史 259頁.
- 23) 安藤広太郎, 日本古代稲作史雑考 33頁.
- 24) 松本信広, 江南の古代文化. 「印度支那の民族と文化」 312頁.
- 25) 安藤広太郎, 前掲書 9頁.
- 26) 松尾孝嶺, Geneological studies on the cultivated rice. 農業技術研究所報告D 第3号.
- 27) 農林省稲作史研究会, 古代出土米 盛永博士解説.
- 28) 藤田亮策, 朝鮮考古学研究 144頁—148頁.
- 29) 横山将三郎, 朝鮮史前土器研究 II 類型と地方差 「人類学先史学講座」 9.
- 30) 横山将三郎, 全上文献 III 北鮮土器文化 IV 西鮮土器文化.
- 31) 江北を含む中国東南沿岸地方の調査は決定的に重要な意義をもつと考えるものである。この地方の状況が不明である現状に於いては単なる推定論をかゝつげうるに過ぎない。その実証は今後にまたなくてはならない。

- 32) 小林行雄, 日本考古学概説 37頁.
- 33) 揚子江から華南にかけての沿岸地方の移動は秦の統一時代の動乱によつて大きく促されているのでないか。そして西鮮えの移動は秦末漢初の動乱が大きく作用していると思われたいであろうか。以上は推定にしか過ぎないので、今後詳考の機会をもちたいと思つている。
- 34) Wagner, W. Die Chinesische Landwirtschaft. Berlin. 1926 P. 579.
- 35) 山根甚信, 家畜水牛の起源と伝播. 植物及動物 8 (9—12).
- 36) 火耕水耨の技術については西嶋定生氏が世界歴史事典 4 巻に於いてとり上げている。
- 37) 南島に於ける南方農耕文化北上の問題は金関丈夫博士が「南島の古代文化—特有の農耕文化の存在」(毎日新聞昭和29年6月3日学芸所載)なる論文に於いてふれておられる。この想定についてかきげられた最初のものである。
- 38) 伊波普猷, 朝鮮人の漂流記に現れた十五世紀末の南島「をなり神の島」。
- 39) 縄紋後晩期に於ける甑らいものの発見例については、小川五郎氏が山口県の瀬戸内に面する岩国遺跡に於いて底部に一孔を有する例を3例発掘されている。孔は甕型土器の底部にあけられたものである。同上遺跡からは耨器と見られる長型扁平の打製の石器が多数えられることを小川五郎氏は御教示下さつた。その後岩田遺跡調査報告書(1954)によつて詳細を知つた。
尚倉敷考古館の鎌木義昌氏は倉敷市福田貝塚から縄紋後期も古い時期に属する土器の器底に多数の小孔を有する例が出土したことを教示された。
- 40) 藤田安二, 古事記植物考. 台湾博物学会報 30 (200, 201).
- 41) 造船用石器の分布については昭和29年10月民俗学研究所に於いて波照間島調査報告をスライドによつて金関博士が行われた際、金関博士によつて所説が述べられた。列席の松本信広博士は深い関心をもたれたようであつた。
- 42) 馬淵東一, インドネシアの物質文化. 新亜細亜 5 (2).
- 43) 松本信広, 印度支那の民族と文化 274頁.
- 44) 斉藤正雄, インドネシアの稲作祭祀. 新亜細亜 5 (4).
- 45) 新村 出, 日本人と南洋(上掲) 147頁 東方言語史叢考.
- 46) 奥里将建, 古代語新論 490頁.
- 47) スクモと綴がらをよぶ地方についての記載は東条操編全国方言辞典によつた。
- 48) 柳田国男, 海上の移住. 民間伝承 18 (7).
- 49) 伊波普猷, 十五世紀末の南島(前掲) 89頁「をなり神の島」。
- 50) 金関丈夫, 南島の古代文化(前掲).
- 51) 伊波普猷, 日本文化の南漸. 「をなり神の島続編」。
- 52) 伊波普猷, 全上論文.
- 53) 柳田国男・折口信夫(対談)日本人の神と靈魂の観念そのほか. 民族学研究 14 (2).
- 54) 金関丈夫, 南島の古代文化(前掲).
- 55) 折口信夫, 国文学の発生(第三講) 51頁—52頁. 折口信夫全集 1.
- 56) 和歌森太郎, 六月一日. 民俗学 2.
- 57) 浜田秀夫, イネの由来並に分布について. 農業及園芸 10 (7).